岩屋谷古墳群他発掘調査

1981

伯太町教育委員会

序

伯太町には数多くの古墳があります。しかし、これらの多くは、昭和初期に盗堀、乱堀され破壊されたので、古墳などをとおしての伯太町の古代の調査研究には何等手もつけられていません。

このたびの座王古墳をはじめ、岩屋谷古墳群の調査は、これらの古墳が井尻地内における県営ほ場整備事業の工区内に位置しており対象となる古墳を保存するためにその範囲を確認する調査を実施したのであります。

これを機会に町民一般の文化財に対する関心を一層高めると共に保存、顕彰に意を注ぎたいものと考えます。

このたびの調査にあたり、県教育委員会文化課、ならびに東森市良氏のご指導、青木博調査員のご協力に対し深く感謝いたします。

昭和56年3月

伯太町教育委員会
教育長　高　橋　晨一郎

例　言

1．本書は、伯太町井尻地内における県営ほ場整事業にともなう発掘調査の報告書である。

2．調査は、東森市良の指導の下に青木博が行い、板持雄二、吉木功が補助した。作業員は、戸崎雄吉、伊豆名健吉、遠藤誠治、塩見正義、三島勝子で行った。

3．遺物の整理は青木博、吉木功、妹尾由香、福田道子で行った。そして、秋日紀子、玄行政美、佐藤啓子が手伝った。

4．本書の執筆、編集は、東森市良指導の下に青木博があたった。

目　次

序 ……1
例言……2
Ⅰ　調査にいたる経過……3
Ⅱ　位置と環境……7
Ⅲ　調査の概要……9
Ⅳ　遺構と遺物……21
Ⅴ　小結……43

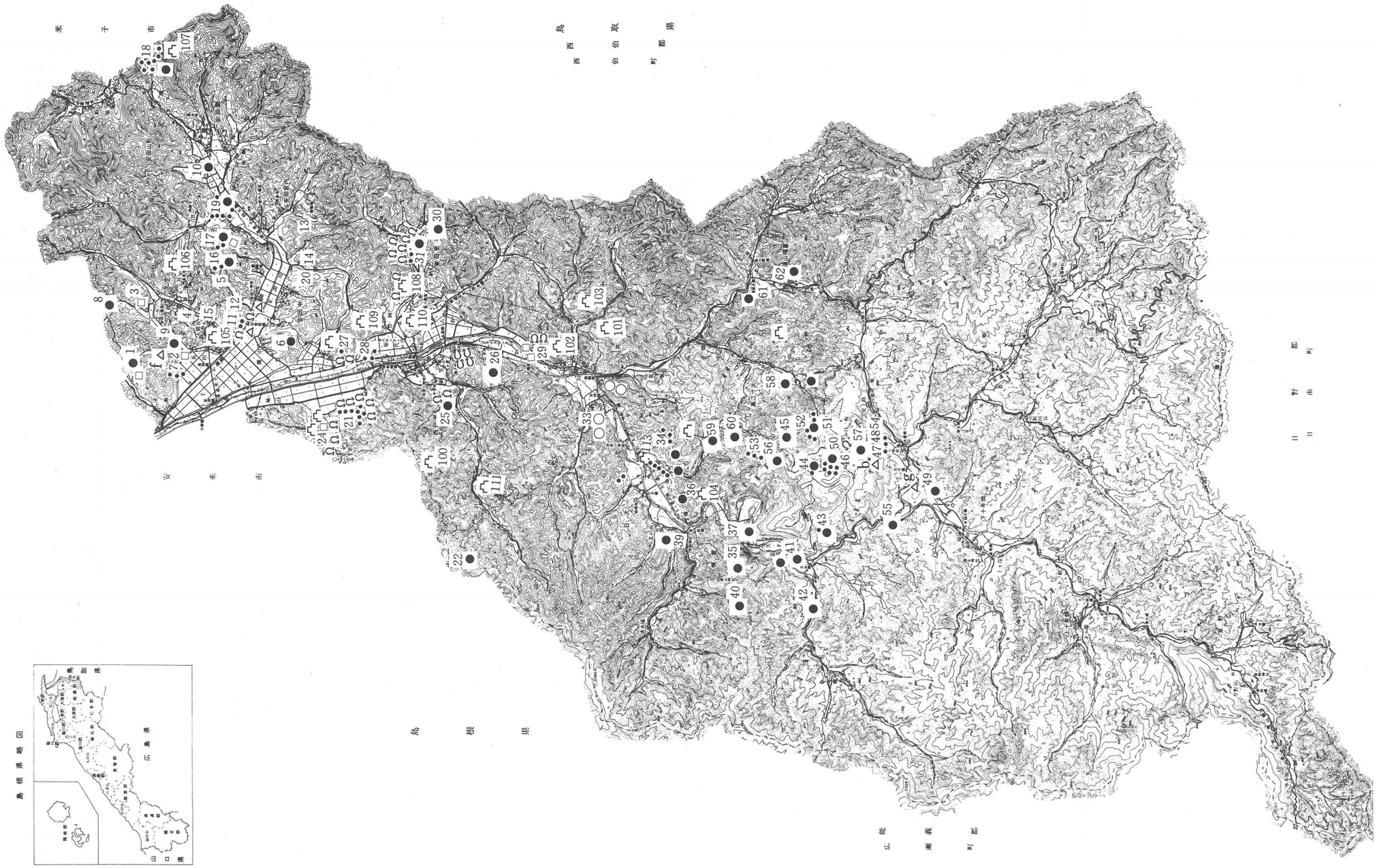
Ⅰ　発掘調査にいたる経過

伯太町における古墳等埋蔵文化財は、安田、母里地区においてその多くを見ることができ、しかも大部分が山上等に存在し、開発によるトラブルを招くことは近年少なかった。

しかしながら、ここ数年ほ場整備事業の推進により、ほ場に残存する古墳等が破壊される怒れも出て来た。特に井尻地内においては以前よりほ場中に数基の古墳が残存しており、これらの調査、保存が急務となった。

そこで、昭和54年度より、県文化課の指導、助言を得ながら、ほ場整備担当課との協議を重ねて来た。その結果、ほ場整備対象地内に残る５基の古墳について、昭和55年度において、国、県よりの補助を得て、古墳の範囲、残存状況を確認する調査を行うことに決定した。

しかし、調査員の確保がむずかしくて、予定より遅れ、昭和55年11月より本調査を実施した。



米子市
鳥取県
西伯町
安来市
鳥根県
広瀬町
日野郡
日南町
島根県略図
鳥取県
広島県
山口県

遺跡番号表

	古墳		備考		遺跡		備考		城跡(中世)		備考
安田	9	御崎山古墳	円	a	田面崎遺跡	弥生		105	長田城跡	室町	
	5	東塚古墳	円	c	岩清水遺跡	弥生		106	鉢伏城跡	室町	
	11	石堂古墳郡		d	円部落合遺跡	古墳		107	新山城跡	室町	
		石堂古墳郡第1号古墳	方	e	中谷遺跡	古墳					
		石堂古墳郡第2号古墳	円 径7	f	虫尾遺跡	弥生					
		石堂古墳郡第1号古墳	方		宮内遺跡	古墳					
		石堂古墳群第4号古墳	径7.8		大森神社遺跡						
		石堂古墳群第5号古墳	方		替地遺跡	縄文					
		石堂古墳群第6号古墳	方		寺床遺跡						
	19	御戸古墳群	円9方1		市向遺跡						
		御戸古墳群第1号墳古	円		キャア塚遺跡	経塚					
		御戸古墳郡第2号古墳	円		五輪成遺跡						
		御戸古墳郡第3号古墳	円		曹蒲遺跡						
		御戸古墳群第4号古墳	円		西垣内遺跡						
		御戸古墳群第5号古墳	円		小赤ハダ遺跡	古墳					
		御戸古墳群第6号古墳	円								
		御戸古墳群第7号古墳	円								
		御戸古墳群第8号古墳	方								
		御戸古墳群第9号古墳	円								
		御戸古墳群第10号古墳	円								
	17	赤ハダ古墳群									
		赤ハダ1号墳	円								
		赤ハダ2号墳	円								
		赤ハダ1号墳									
		赤ハダ4号墳									
		赤ハダ5号墳	円?								
		赤ハダ6号墳									
		赤ハダ7号墳	方								
	7	文珠山古墳群	円4基								
	6	横手古墳	円								
	15	中山横穴									
	14	千本山横穴									
	13	中山横山横穴									
	4	長田古墳									
	3	穴ケ峰古墳	方								
	8	真の谷古墳	円								
	1	金掘古墳群	方、円 辺5 径5								
		金掘古墳群第1号古墳	方								
		金掘古墳群第2号古墳	円								
	10	丸山古墳	円? 径4								
	20	坊床横穴群	2穴								
	18	足王山古墳群	円								
	16	小赤ハダ古墳群	円								
		小赤ハダ古墳群第1号古墳	円								
		小赤ハダ古墳群第2号古墳	円								
		小赤ハダ古墳群第3号古墳	円								
		小赤ハダ古墳群第4号古墳	円								
	12	石堂横穴群									
	2	髭濡古墳群	方、円								
		髭濡古墳群第1号古墳	方								

	古墳		考		遺跡		備考		城跡(中世)		備考
安田		髭濡古墳群第1号古墳	円								
母里	27	井戸古墳群	2基・前方後方					108	高解城跡	室町	
	28	五反田古墳群						109	豊岡城跡	室町	
	30	上天馬山古墳群						110	亀山城跡	室町	
	31	守納古墳群	円3					111	壇原城址	室町	
	29	神宮寺古墳	2基・方					100	城山城跡	室町	
	24	城山古墳群	前方後方 2 2								
	21	釜谷古墳群	8基確認 円								
	26	間明山古墳	円								
	25	御殿山古墳	円 径 2 高 3								
	22	佐古古墳群									
	23	招古墳群	円・2基								
	32	守納横穴	6穴								
赤屋		丸山第1号古墳	円	b	上の台遺跡	古墳					
	54	丸山第2号古墳		g	下十年畑遺跡	古墳					
		丸山第3号古墳									
	55	丸山第4号古墳	円								
	53	日向尾根古墳	円								
	51	上の台古墳群									
	46	小丸子山古墳群	方・円								
	47	小丸子山古墳群第1号古墳									
		小丸子山古墳群第2号古墳	円								
	48	小丸子山古墳群第2号古墳	円								
		小丸子山古墳群第4号古墳	円								
		小丸子山古墳群第5号古墳	円								
		小丸子山古墳群第6号古墳	円								
	44	森林峰古墳群	円? 2基								
	52	小松伏古墳群	円								
	45	天神堀古墳群	円								
	49	中ゾネ古墳	円								
	43	穴畑峰古墳群	2基・円								
	50	ノロ山古墳	円								
		比田啓三郎氏宅裏横穴									
峠の内	41	栗倉古墳群									
	42	矢原古墳									
	35	峠の内県道様古墳									
高江寸次	58	岩谷谷古墳						112	茶碓山城跡	室町	
	59	上塚田古墳									
	60	垣の内古墳									
須山福富	61	塚田古墳									
	62	家の向古墳									
横屋	39	岩屋が平古墳						104	霧が丸城跡	室町	
	37	上稲田古墳									
	36	要害山下古墳									
	40	比姿山御陵古墳	円								
	56	日向峰古墳群	3基・円								
	38	丸山古墳	円					101	龍ヶ尾山城跡	室町	
井尻	34	座王古墳群	11基・円					102	高守山城跡	室町	
	33	サコ谷古墳						103	平の城跡	室町	
								113	日次城跡		

Ⅱ　位置と環境

島根県能義郡伯太町は、島根県と鳥取県との県境に位置しており、北端は安来市に、南端は鳥取県日南町に接する、南北に細長く、南と北では、標高差のきわめて大きな町である。特に、母里と井尻とを境にして、山の表情ががらっと違って、南に行くに従って、山が高く、山と山との間隔も狭くなり、険しくなってくる。

ところで、この町を南北に流れる伯太川は、上流から中流域にかけて支流を多くだき入れながら狭く速く流れるが、井尻の日次あたりから、次第に広がりをもち、母里から安田あたりになると、広くゆったりと流れる天井川となる。そして、更に安来平野を通り、中海に注ぎ込む。伯太町の集落の多くは、この伯太川とその支流とによってできた平野、及びこれらの谷の平地に点在している。

伯太町において、現在まで確認されている主な遺跡は、図表の通りであるが、注目したいのは、母里以北と井尻以南との遺跡の有様の違いである。母里以北の著しい特徴は、田面崎遺跡、岩清水遺跡、安田小学校校庭遺跡、丹部石原明太郎宅裏土器出土地、安田中土師谷遺跡、安田関坊床、安田中西奥谷等の安田川流域での弥生遺跡の密集であり、城山第３号墳、第４号墳、井戸第１号墳の小前方後方墳や方墳が認められることであり、横穴もまた、現在、母里以北で多くみられ、井尻以南では、数穴が認められるだけである。

これに対し、井尻以南では、今回の発掘調査でも発見できたが、下十年畑遺跡、赤屋月坂遺跡等、縄文遺跡があり、古墳では、横穴式石室を埋葬施設にもつ古墳が集中していることである。母里以北では、現在のところ、安田関の足王山古墳群の中に横穴式石室をもつものがあるだけである。特に赤屋地区の〝上の台”は、標高約300ｍの高地にもかかわらず、小古墳群が群集して、数十基にも及んでいる。しかも、それらの多くが、横穴式石室をもつ古墳であり、あたかも、井尻以南において、古墳時代後期の中心地をなすかのような有様である。

今回、井尻地区において発掘調査を行った５つの古墳もすべて横穴式石室を埋葬施設にもつ古墳であったが、これら５つの横穴式石室をもつ古墳は、単独で存在するのではなく、それぞれ、目と鼻の先に１つずつ横穴式石室をもつ古墳が認

められた。座王古墳第７号墳ー座王古墳第８号墳、上塚田古墳ー垣の内古墳、岩屋谷第１号墳ー岩屋谷第２号墳、塚田古墳ー家の向古墳、というような状況である。

座王古墳群の場合は、寸次川が伯太川と合流する地点をとり囲む山の尾根や中腹にある。合流点に近い所から、中ほどまでの川の両側の山の尾根に古墳が７基あり、その奥に横穴式石室をもつ第７号墳、第８号墳がある。座王古墳群の、伯太川をはさんだ向う側にも、古墳が１基あり、平井ケ谷の畑地から、甑の把手や須恵器片、土師器片が出土していることから、古墳時代の住居址の存在が考えられる。

上塚田古墳の場合は、寸次川上流の山裾らしき地点にあり、その南側の山の尾根に垣の内古墳がある。その南側の山の尾根を登りつめると“上の台”にたどりつく。

岩屋谷第１号墳、第２号墳の場合は、上の台、部張から流れ出て福富川に合流する高江川の上流附近の川に向かって突き出た西側の山の尾根上にある。この西側の山並も“上の台”に連なっている。

塚田古墳の場合は、須山川と福富川との合流点にある。そこから500ｍほど南の福富川の東側の山の尾根には家の向古墳がある。

以上、みてきたものの他に、井尻以南で現在知られている古墳から、サコ谷古墳・舞鶴山八幡宮裏山古墳周辺地域、要害山下古墳・岩屋が平古墳周辺地域、上稲田古墳・峠の内県道横古墳周辺地域、栗倉古墳・矢原古墳周辺地域、丸子第４号墳、中ゾネ古墳周辺地域と、地形的にも比較的にまとまった地域を想定し得る。しかし、こうした小地域の人々の生産活動がどのようなものであったのか、又、それぞれの小地域間の関係の様相がどのようなものであったのかは、この地域での調査例及び報告がないので明らかでない。

Ⅲ　調査の概要

今回の発掘調査は、遺跡の範囲確認、あるいは遺跡の保存状態の確認を目的として1980年10月21日より３日間伐採を行い、1980年11月４日より、座王古墳、上塚田古墳、岩屋谷第１号墳、同第２号墳、塚田古墳５基の地形測量を開始、終了次第、現場発掘に入っていった。ほぼ、座王古墳→上塚田古墳→岩屋谷第１号墳→同第２号墳→塚田古墳という順序で現場発掘を行い、1981年３月31日をもって、発掘調査を終了した。

今回の調査は、1980年12月から1981年２月中頃までの記録的な大雪のため、調査が思うように進まず、難航した。しかし、雪をかきながらの悪戦苦闘の末、1980年11月から1981年３月末日までの約５ヶ月間をもって、作業中の事故もなく、無事終えることができた。

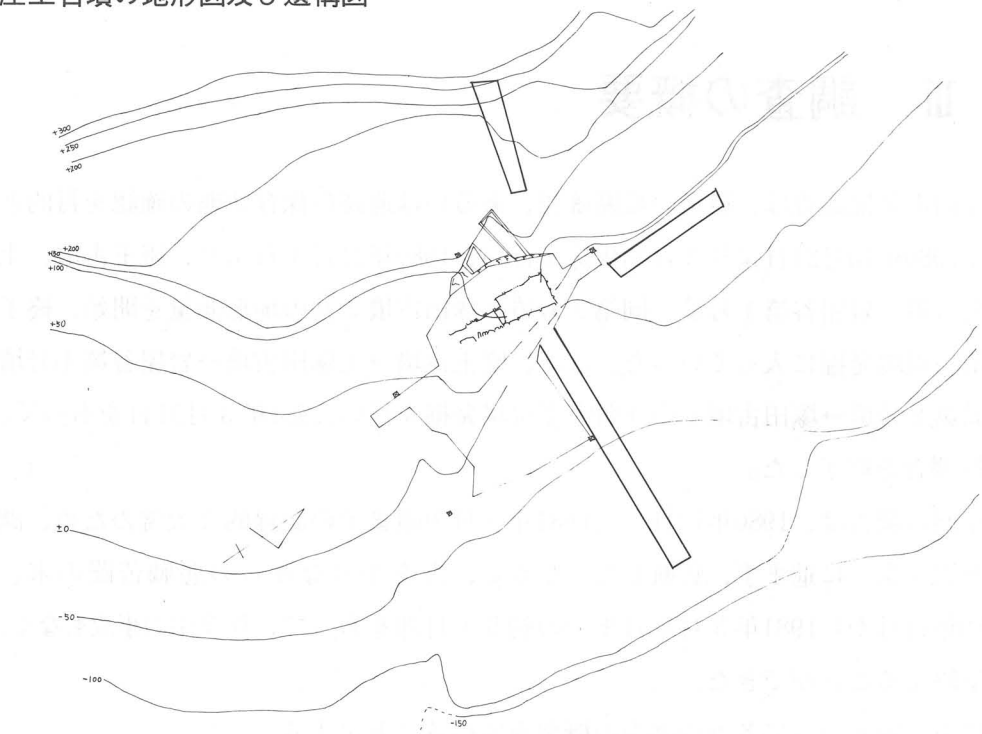
以下、順を追って各々の調査の概要を述べることにする。

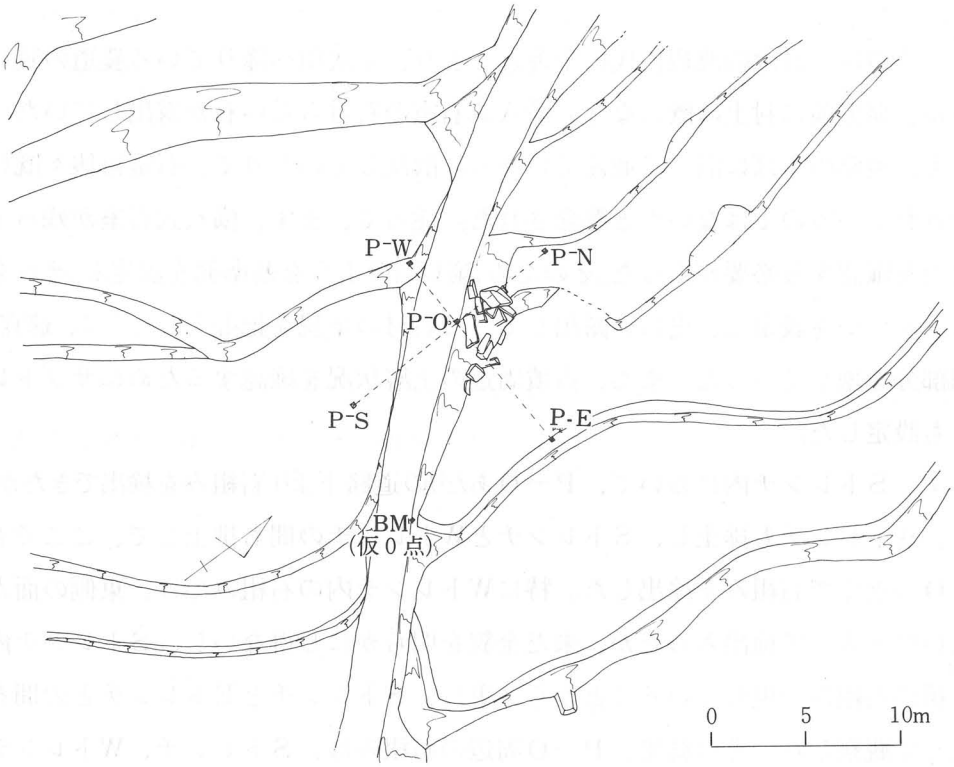
座王第７号古墳

この古墳は、日次の渡辺仁氏の牛舎近くより、寸次川へ降りている農道の脇にあるが、発掘前に封土は既になく、横穴式石室の石材らしい石が露出していた。しかも、道路の下ばに沿って並んでいたり、散乱していたりで、石室自体も既に破壊されているのではないかと懸念された。従って、まず、横穴式石室が残っているかを確認する必要があった。そのため、第O図のような基準軸を設定し、それを基にトレンチを設定し、更に、露出している石材の全貌を把握するために、適宜、発掘部分を増していった。また、古墳周辺の土層状況を確認するためにサブトレンチも設定した。

まず、Ｓトレンチ内において、Ｐ－Ｏあたりの道路下より石組みを検出できたが、更に、Ｗトレンチも排土し、ＳトレンチとＷトレンチの間も排土して、ここでもＰ－Ｏの近くで石組みを検出した。特にＷトレンチ内の石組みでは、東側の面がきれいにそろって検出されたが、未だ全貌を明らかにし得ないし、Ｓトレンチ内に２組の石組みが現れていることから、更に、ＳトレンチとＥトレンチとの間を排土して観察した。その結果、Ｐ－Ｏ周辺の石組みは、Ｓトレンチ、Ｗトレンチ

座王古墳の地形図及び遺構図





の石組みに連なるが、他の石組みは、南東に向い、約３ｍ四方に敷きつめられていた。これは、道路の方向と一致しており、しかも、ほぼ道路下にあたっている。これは後になって判明したことだが、この敷き石の下から須恵器片等が出土していることや、石室の羨道部が破壊されていることから、これらの敷き石は、羨道部の側壁石及び天井石を利用して作られた２次的なもので、古墳築成以後のものであると考えられる。

そして、Ｅトレンチ、Ｎトレンチ、ＥトレンチとＮトレンチの間の排土、あぜの除去、更に、原位置にない露出していた天井石と思われる石材の除去を行った結果、ほぼ、横穴式石室の全貌が明確になった。石室は、大略南北を主軸とする左片袖、全長約６ｍの横穴式石室で、当初の予想を大幅に上回る保存度であった。つまり、羨道部の両側壁及び天井と玄室の天井と奥壁の一部の欠損があったのみで、玄室の側壁も玄門側の閉塞施設も、ほぼ完全に残っていた。しかも、注意をひくのは、その閉塞施設の石に混って、鉄滓が多数使用されていることであり、裏どめ石としても多数使用されていることである。そして、東側壁の石室外部には、人頭大の石や鉄滓が山積みされていて、一見、突出部を思わせる感がある。

ところで､この石室内の検出について協議した結果 ､天井石を除去しているので、遺物、特に腐敗しやすいものがあれば困ることや、古墳の築成時期や古墳被埋葬者及びその集団の性格を判断する資料を得るために、石室内の清掃作業を実施することにした。

玄室内には、黒ボクが最上側石の上面まで堆積していたが、それを除去していくと、人頭大の石やこぶし大の石と共に、副葬されたと思われる須恵器・鉄製品及びガラス小玉が出土した。玄室内の堆積土には、縄文土器、黒曜石片が多数混入していた。恐らく、この古墳のごく近くに、縄文遺跡があるに違いない。ところで副葬品は、最上側壁石の上面から約120～130㎝下から出土し始めた。須恵器は、蓋杯の蓋と身のみだが、奥壁の左隅角と玄門の右側壁部に２分されて出土した。奥壁の左隅角には、15個体分が２列に並べて置かれていたが、玄門部では、13個体分がかためておかれていた。しかも、その内、蓋と身が重ねてあったのが４組ある。また、奥壁の左隅角と玄門部には、それぞれ１個ずつ土師器も出土している。奥壁部は椀で、玄門部は高杯であった。鉄製品は、ほぼ玄室全般より出土しているが、密度からいえば、玄室の前半分に多い。特に玄門部では、鎌、斧、

鉄鏃（平根式）が集中している。他に刀子（奥壁の左隅角出土）、尖根式鉄鏃等がある。

ガラス小玉の出土は、原位置で確認できるのは、左側壁の中央部で１個だけだったが、排土中から52個（内４個は小片よりの復元数）見つかったが、いずれも左側壁中央部の１個の周辺より採集した土から多く発見されていることから、このあたりが原位置ではないかと思われる。

ところで、玄室内の床面であるが、副葬品出土の最下層と黒ボクから、黄褐色～褐色の小さな砂粒ないしブロック混入の黒色土に変化する面をもとに決定した。

更に、閉塞施設に使用された鉄滓が、後世の混入か否かの確認と共に、追葬の有無の確認を行うために、閉塞石の断ち割りを実施したが、その結果、鉄滓は玄門内にも入り込んでいるので、明らかに埋葬後の閉塞時に使用したものであることが確認できた。しかし、追葬の有無は、床面（羨道部の床面は未検出）の上に比較的大きな石を使い、その上にこぶし大の石や、それよりやや大きい石、そして鉄滓を使って閉塞している状況からだけでは判断しかねる。玄室内の出土状況、土層状況及び時期の明らかに違う２つの型式の土器出土が確認されれば申し分ないが、今のところ判断を保留せねばならない。

さて、この古墳の大きさの確認についてだが、発掘前に、古墳の周辺は水田、畑地に開墾され、しかも、古墳の真上を農道が通っていることから、古墳築成時の状況を復元することは、きわめて困難である。Ｓトレンチの土層状況は、大きく分けて、現水田面と旧道路時の水田面の第１層と黄灰色粘土質土層の第２層（ここには鉄滓が混入しており、須恵器片、土師器片を色含する）、第３層の黒色系土層となるが、Ｓトレンチ内の羨道部入口の側壁石は、第３層の黒色系土中にすえられていることから、古墳築成時と深く関わっている面であることがわかる。しかし、古墳の領域を決定する溝、加工面（落ち込み等）は認められない。

Ｗトレンチにおいても、Ｓトレンチと同様で、道路拡張時の盛土・現表土の第１層・灰黄色粘質土層の第２層と第３層の黒ボクの黒色系土層となる。ここは、第３層の黒色系土が石室の裏どめ石より80cm西から約60cm落ち込んでいる。これが、石室の掘り方なのか、２次的な削平なのか、判断しかねるが、石室の掘り方になるかもしれない。ところが、そのＷトレンチ近くの石室の角には、別に、石室のすぐ外側をまわる掘り方が認められるので、断定しかねる。しかもこの掘り

方は、左側玄室外部の裏どめに突き当るような方向であった。それ以外の溝及び加工面は認められなかった。

Eトレンチの場合は、表土、現耕作土の第1層、鉄滓の集中する灰黄色系土層の第2層、そして、黒色系土層の第3層になっている。土器は、第3層の上面から出てくる。また、この第3層は、P－Oより東へ6～7mの地点で約10cmほど落ち込み、更に50cmの平坦面（テラス状）をなしている。黒色系土は、今までのトレンチにおいても、古墳築成と深く関わっている土層であることから、上の落ち込みを古墳の大きさの目安にしてもよいと考える。

そして、Nトレンチの土層状況は、大きく、表土、現水田面の第1層、灰黄色～黄灰色粘土層の第2層と黒色系土の第3層に分かれる。第2層中からは、須恵器片が出土し、第2層と第3層の間からは、土師器片、黒曜石片、第3層からは、縄文土器片が出土した。ところが、ここにおいても、石室の掘り方らしい層の変化が認められなかった。

以上見てきたように、トレンチにおいて、古墳の範囲を確認するには、きわめて乏しい成果しか得られなかった。1つは、羨道部入口の確認であり、2つは、EトレンチのP－Oより東へ6～7m地点での落ち込みである。そのために、更に延長トレンチ、中央トレンチを設定し、確認することにした。

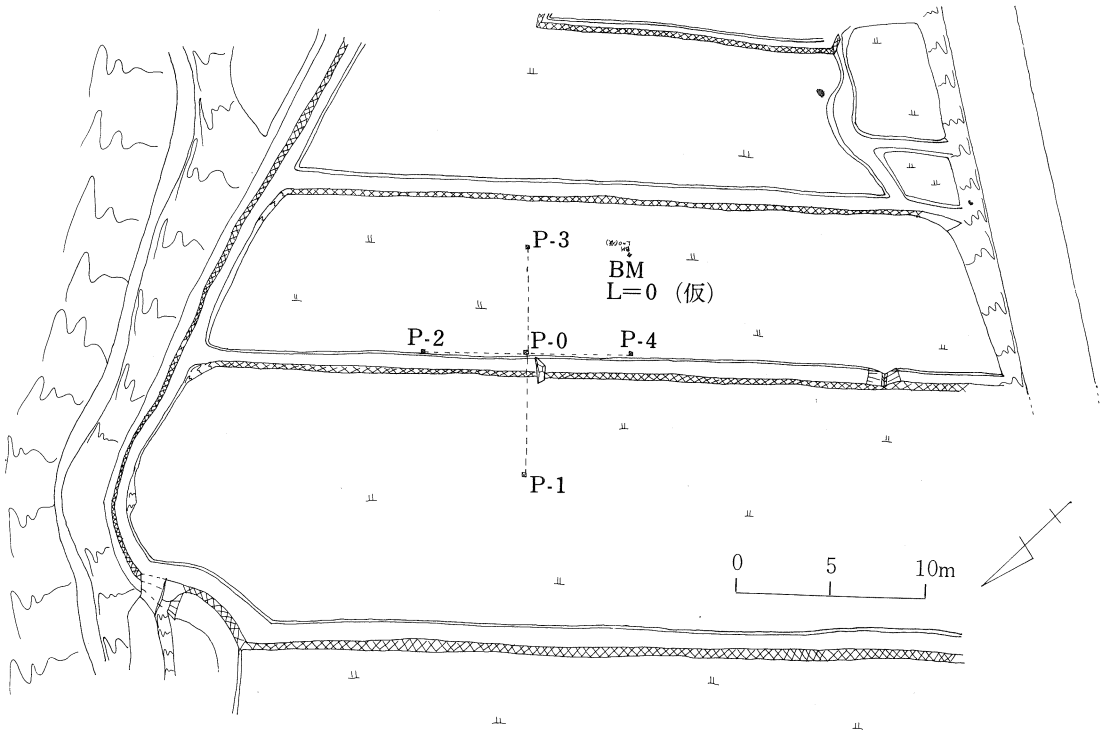
また、石室の掘り方であるが、石室のすぐ外側にそれらしい稜線が認められるが、断定しかねるし、そうであっても、西側と北側における掘り方の有様がつかめていない。

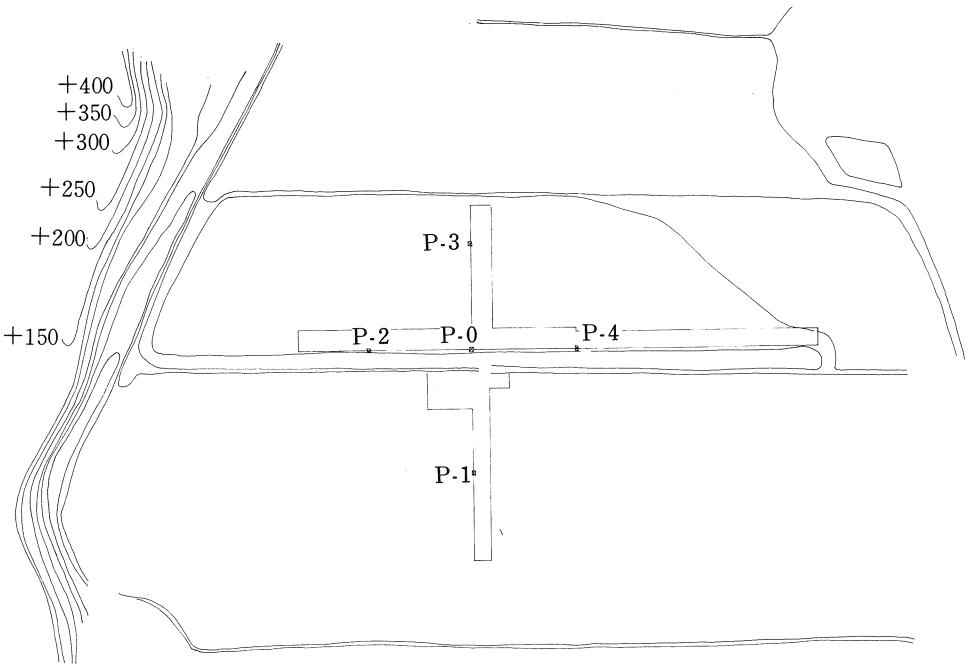
このように、古墳の大きさは、推定の域を出ない。また、石室の掘り方、古墳の築成方法は確認できなかった。

上塚田古墳

寸次部落から高江部落へ越える峠より、寸次部落よりの水田の中に横穴式石室の石材らしい石が1個立っている。昔からの言い伝えで、「塚さん」と言われていることからも、石室の残骸らしいが、その石材が石室のものかどうかの確認と、また古墳の大きさの確認を行うために、図のような基準線を設定し、それを基にしてトレンチを設定した。その結果、第3トレンチと第4トレンチの交叉地点より比較的大きな石とそれを囲む小さな石組みが出土した。また。それを更に囲むように

上塚田古墳の地形図及びトレンチ配置図





落ち込みがみえる。しかし、第2トレンチにおいては、水田作成、更に整地と2次的な加工が2～3度行われているようで、第3トレンチ、第4トレンチ交叉地点に出土した石組みの続きは検出できなかった。しかも、第2トレンチは、かっては現在の高さよりかなり低かったらしく、埋めた跡が断面に顕著に現われているが、石室の痕跡は発見できなかった。ところが、第1トレンチにおいて、露出していた石材の周辺に、土層の違う線がみられ、しかもそれは石材をとり囲み、石材の内面と直交するように伸びている。恐らく、石室のしかも玄室の稜線ではないかと推測できる。

ところが、古墳の大きさについては、既に、2次的削平加工がかなり進んでいる事と、盛って作られたあぜのすぐ後方にトレンチを設定した事とが原因で、確認し得なかった。

更に、出土土器もきわめて少ないので、この古墳の築成時期を考えることもかなり困難な状態である。

岩屋谷第1号墳

この古墳は、高江部落から部張“上の台”へ抜ける街道の西側のやや高い水田のあぜにあり、横穴式石室の玄室の約3分の2が残っているが、前の3分の1と羨道部が破壊され、天井石が落下している。かなり以前に開口していたらしい。

「伯太町史」には、出土遺物として、硬玉製匂玉1（長3cm)、須恵器杯3（径12～14cm、高3.6～4cm)、高杯1、提瓶1（高18～19cm、径16cm）があげてある。この古墳の周辺の地形から、北側の急で落差の大きい斜面が、北側における古墳の境界をなしているように思われる。

従って、古墳の大きさの確認を行うために、図のような基準軸を設定し、それを基にしてトレンチを設定した。

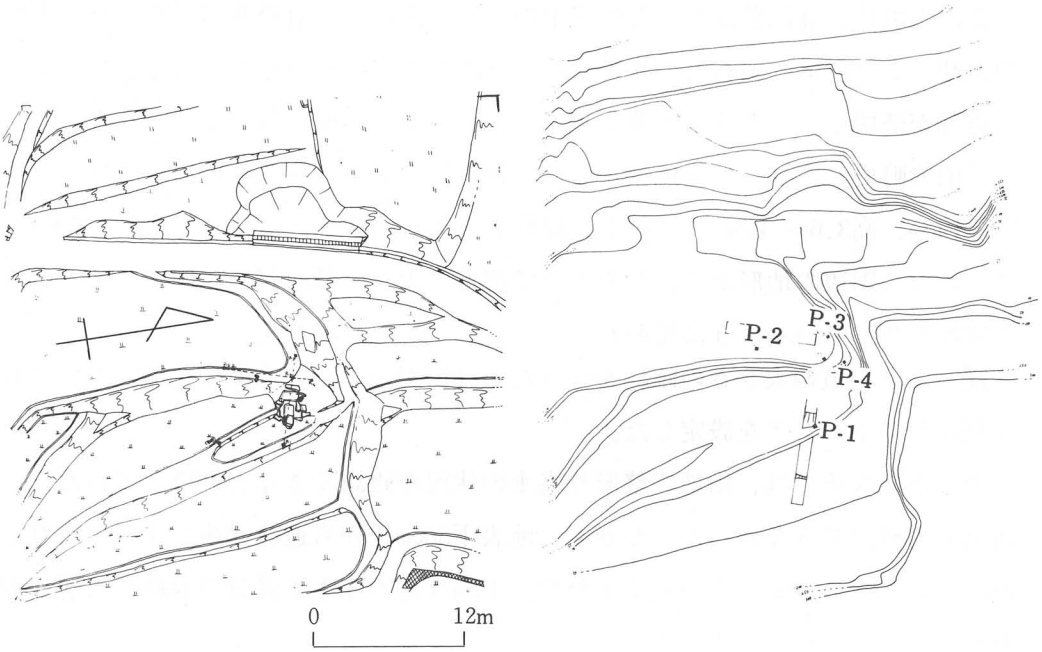
第2トレンチでは、山地の整形や盛土の状況が確認できると期待していたが、両者とも確認できなかった。しかも、地表下80cm位から遺物が少しずつ出たりした。また、第2トレンチの石室よりで、1cmほどの厚さで鉄分の凝縮した層が現われた。

それに対して、第1トレンチは、きわめて明瞭に加工面(2次的加工も含めて)が現われている。それは、残存した石室より約2m東に出た地点での落ち込み(こ

れは、P—①のあぜの内側になる）と、P—①のあぜより更に2.6～2.8m東に出た地点にある。その最初の落ち込みと２番目の落ち込みの間は、比較的平坦な面になっている。第１トレンチの中からも、須恵器片が出土しているが、残存した石室内にも、崩れた石材の間からも出土しているので、この古墳の築成時期は、それによって比定できると考えている。

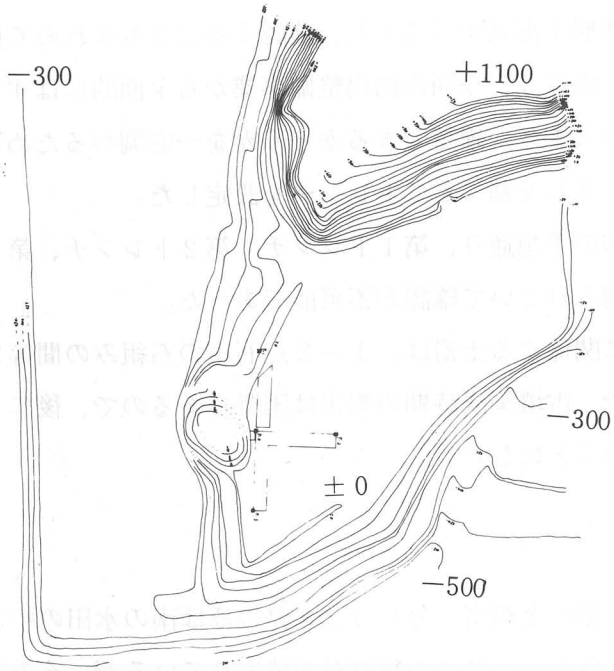
岩屋谷第２号墳

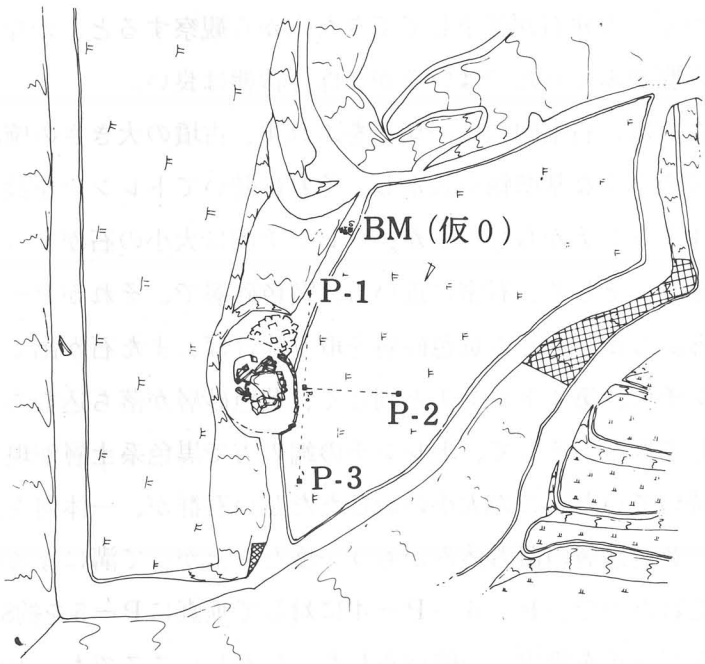
この古墳は、岩屋谷第１号墳より更に高江から部張・“上の台”に抜ける街道を登った西側の山合の水田の中に、封土を消失し、横穴式石室を露呈した状態で存在している。江戸時代から昭和時代にかけて、この古墳の後方の平坦部に人家があったとのことで、その生活品の残骸が古墳の周りにも捨てられている。それと同時に、石室の石材も原位置でないものも多く認められる。地元の人の話によれば、この古墳のあるところは、庭先になっていたという。



岩屋谷第１号墳の地形図及びトレンチ配置図

岩屋谷第２号墳の地形図及びトレンチ配置図





この古墳のすぐ背後まで山の尾根が来ており、以前は、ちょうど古墳のあるところへ伸びていただろうと想像できるが、現在は削平されている。更にこの古墳

の前方（ほぼ北東にあたる）も削られて、水田として利用されている。よって、古墳築成時の地形を復元することも、確認することもきわめて困難な状況であるし、この古墳の周りは、今回の圃場整備事業から全面的にはずされることになったので、古墳の大きさが確認できるかどうかを一応調べるために、図のような基準軸を設定し、それを基にしてトレンチを設定した。

しかし、当初の予想通り、第１トレンチ、第２トレンチ、第３トレンチすべて、既に地山まで削られていて確認が不可能であった。

また、古墳に関係する土器は、１～２点石室の石組みの間等から発見したものの他はないので、古墳築成時期の想定は困難であるので、後にこの古墳が調査される時期を待つことにしたい。

塚田古墳

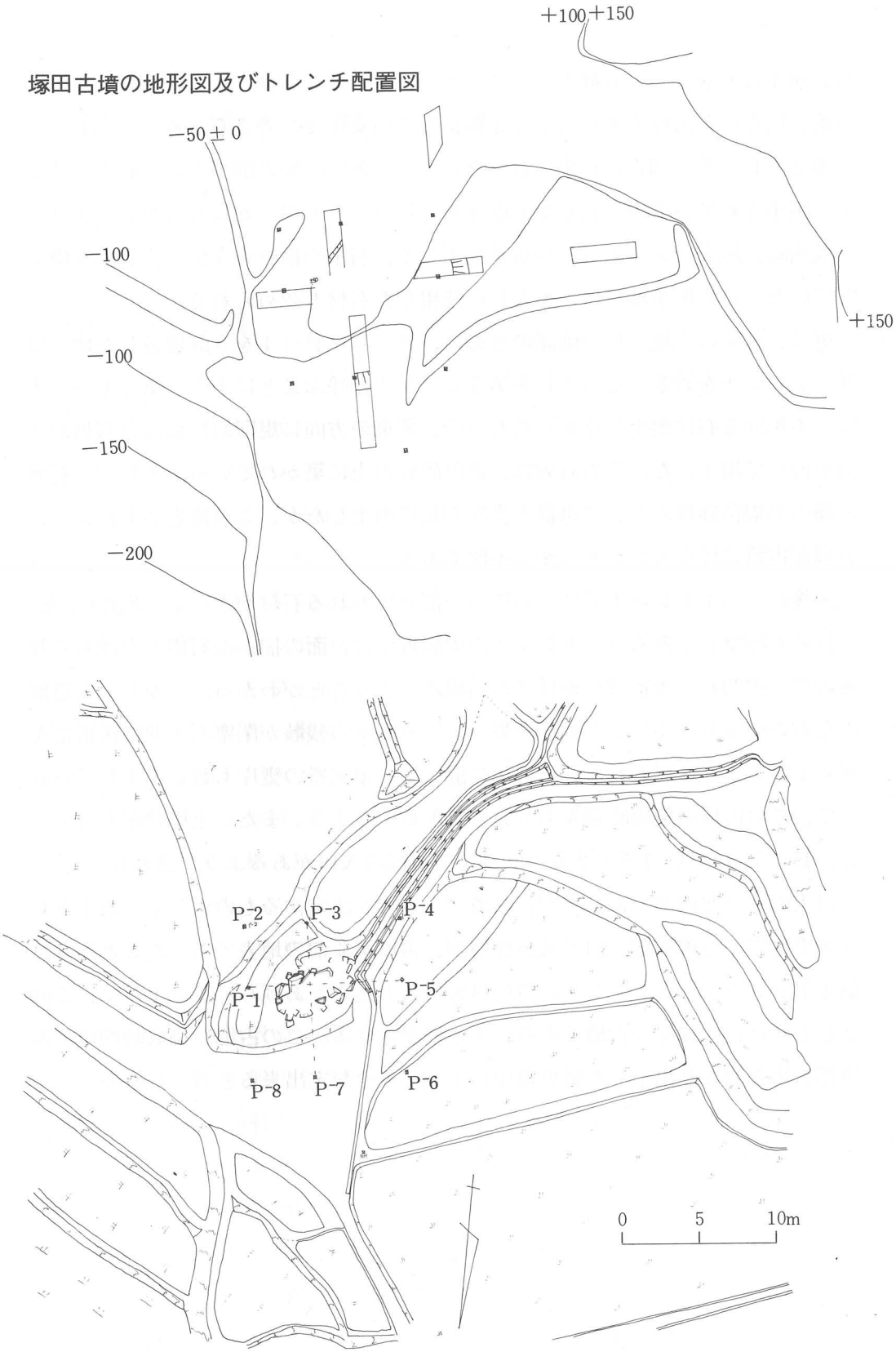
この古墳は、須山と福富に分れる三叉路のほぼ南の水田の中に、横穴式石室を露呈している。現在、かなりの数の石が積まれているが、そのほとんどが後に置かれたものらしい。概ね、横穴式石室の石材は安山岩であるから、そうでない石との区別がつく。天井石が落下してできた穴から観察すると、かなり大きな石室で、右側壁の腹がふくらんではいるが、保存状態は良い。

今回の調査では、石室内には一切手をふれず、古墳の大きさの確認のみを行うことにし、図のような基準軸を設定し、それに基いてトレンチを設定した。

まず、第４トレンチから行ったが、トレンチ内に大小の石がびっしりとつまって出土してきた。そして、石室に近い方は黄色砂層で、それがＰ－７あたりで落ち込んでいる。しかし、その黄色砂層を取り除けば、また石が出てくる。

第３トレンチも、第４トレンチと同じく、黄色砂層が落ち込むあたりから大小の石が出土してきた。そして、トレンチの端の方で黒色系土層が現れたが、その下層に石が続いていた。この大小のおびただしい石群が、一体何を意味しているのか、また、黄色砂層の落ち込みがもう一度たち上がって溝になるのではないかと疑問がもたれたので、Ｐ－６～Ｐ－４に対して垂直にＰ－５を約8.5m伸ばした地点にサブトレンチを設定し、確認をした。しかし、ここでも、大小の石が出土。溝らしきものは確認できなかった。これらにより、古墳の西と北側はかなり広範囲に石群がみられることが明らかとなった。そして、黄色砂層があることや、更

塚田古墳の地形図及びトレンチ配置図



に砂層下にも層として石群があることから、それらの石群は、この古墳の周辺が以前、川ないし河原であったことを物語っているように考えられる。

第２トレンチの調査の結果、意外なことに、黄色砂層の削平がみられた。そして、削平されている中に石室が築成されていることも明らかになった。つまり、築成当時、地表であった黄色砂層を削平して、石室の掘り方を作り、石室を構築していた。その削平部には、裏どめに使用した石材も認められる。

更に、古墳の立地条件の確認のために、Ｐ－６～Ｐ－４を３ｍ延長した地点にサブトレンチを設定した。(これを第５トレンチと呼ぶことにする) 第５トレンチは、不規則な石は出土しなかったものの、北東の方向に規則的に並んだ石列が２列平行して出土した。その石列は、黄色砂層の上に築かれている。そして、石列の礫の黒褐色砂層から、須恵器の甕片が数点出土したが、この須恵器も含めて、石列が古墳に伴うものかどうかは不明である。

最後に、第１トレンチでは、石室の一部と思われる石材がぎっしりと出土した。それらを観察してみると、トレンチの両脇近くに、面の揃った石組みが認められるので、玄門から羨道部にかけての石組みであることがわかる。しかし、羨道部の左右の側壁も上半分と天井部を失っている。その残骸が閉塞石と共に羨道部を埋めているように思われる。その中に混って、須恵器の甕片も数点出土しているので、この古墳の築成時期をおさえることができよう。また、土層状況からみると、Ｐ－１より東へ1.5～２ｍあたりに羨道部の入口があるように思われる。

以上のような状況であったが、古墳の大きさを決定するものとして、第１トレンチで推定した羨道部入口と黄色砂層が、古墳築成前の地表であったことから、第４トレンチ、第３トレンチの黄色砂層の落ち込みがあげられる。よって、この３点から径14～15mの古墳であることが推定される。この古墳の築成時期は、羨道部石組み間より出土した須恵器片によってやや想定出来ると考えられる。

Ⅳ　遺構と遺物

調査の結果、以下のように遺構と遺物を検出した。

座王第７号墳

①　墳　丘

今回の調査によっては、この古墳築成方法を明らかにできなかった。

遺構の範囲については、①横穴式石室の羨道部入口、②Ｅトレンチの黒色系土層の落ち込みと平坦部の存在から、直径13mの円墳と推定した。それは、遺物の出土状況も参考になる。石室外部での出土遺物には、縄文土器、石器（黒曜石片等)、須恵器片、土師器片、磁器片が多数あったが、その中で、奈良・平安時代以降と思われる須恵器片、土師器片、磁器片は、羨道部の攪乱部分以外は、ほとんど、その範囲外の黒色系上面及びその上層より出土している。それに対して、縄文土器、黒曜石片等は、範囲の内外ともに出土している。

②　石　室

この古墳の内部主体は、主軸をほぼ南北にとり、南方向に開口する全長約６ｍの単室、左片袖型横穴式石室であった。石材は、花崗岩の割り石を使用しおおむね小口積みである。ただし2,3の石は、安山岩が使用されている。玄室の長さは、右側壁で2.8m、左側壁で2.8m、奥壁での幅1.73m、玄門での幅１.４ｍの多少歪んでいるが、ほぼ長方形の平面プランである。天井は、床面より約1.2～1.3ｍの高さにあり、奥壁から玄門に向かって傾斜していたと思われる。また、玄室中央の横断面は、台形状を呈している。玄室の構築方法は、まず、長さ85cmの石を横たえ、玄門の梱石とし、幅45cm、長さ１.２ｍの石を立てて片袖として配置する。次に、片袖の石を支えるために、羨道側に石を積んでから、左側壁に梱石の高さと水平に、高さ90cm位に腰石を４枚置いている。そして、奥壁に３枚、左側壁に４枚腰石を置いて形を決める。それから、左側壁はほぼ１段ずつ水平に順序よく４段にわたり、比較的大きな石を積んでいる。すき間や水平にするために小ぶりの石をかませている。また、徐々にせり出させ、約20～40cmの持ち送りの積

み方を行っている。

奥壁は、左半分は５段積み、右半分は４段積みを行い、２段目からせり出し、約20cmの持ち送りの積み方を行っている。

右側壁は、やや複雑な積み方が行われている。それは、奥壁が先に積まれたからだと考えられる。つまり、側壁中央部で小ぶりの石を積み上げ、前半分は２枚の石を４段に積み、奥半分は大ぶりの石をほぼ４段に積み上げ、奥壁との間げきのできる隅に小ぶりの石をつめている。また、２段目から徐々にせり出し、約20～40cmの持ち送りの積み方を行っている。

全体として、左右側壁・奥壁は、４回にわたって積み上げられたのか、１つの壁をまず完成させてから次へ移って積んだのか、よくわからない。

また、右側壁、特に前半分は、多数の裏どめ用の小ぶりの石によって支えられていて、平面的に見ると、隅が突出した形をなしている。また、その裏どめ用石に混じって、多数の鉄滓が使われている。奥壁の壁面にも２個使用されていた。しかし、左側壁外部には、裏どめ用石があまり見当らない。

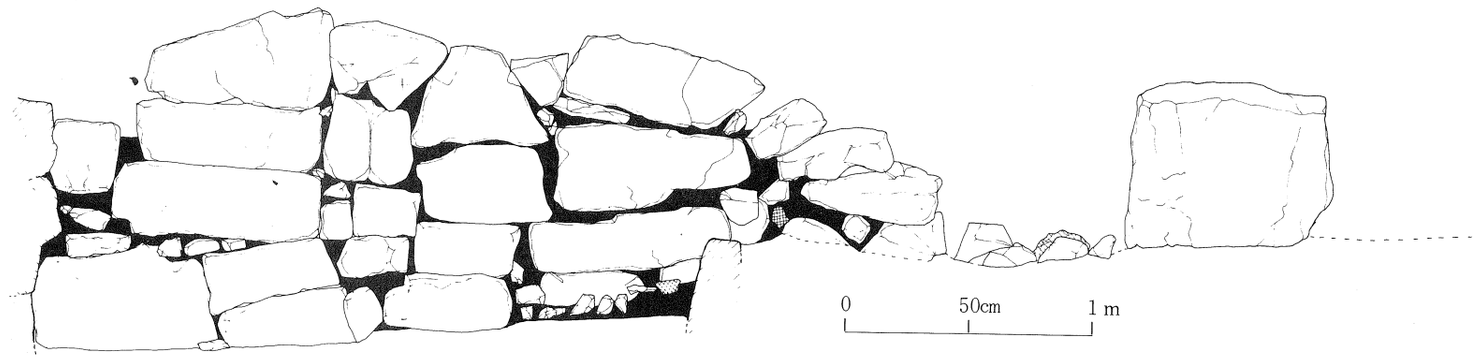
羨道部は、右側壁下部で2.5m、左側壁下部で2.6m、玄門の梱石での幅85cm、入口での幅64cmで、入口部に近づくに従って狭まり、わずかばかり西側に曲っている。天井は、当初あったかどうか不明だが、羨道部周辺に大ぶりの石が２次的に使用されていることから、両側壁、天井を備えていた可能性が強い。ところで、床面は未発掘であるので、玄室の床面との関係、羨道部における供献の有無は、今後の調査に待ちたい。

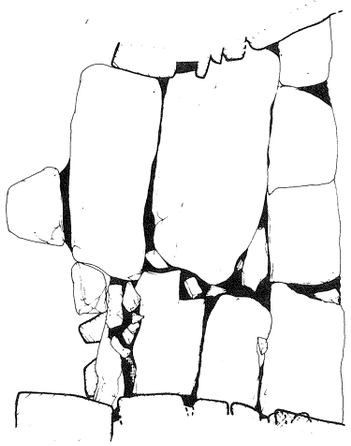
また、閉塞施設として、玄門より羨道部入口に向かって0.9ｍの間、大小の石と鉄滓がびっしりつめ込まれていた。ただ、検出時において、天井と閉塞石との間げきが30cmあったが、断面をみると、明らかに一部が玄門内部に何かの理由で崩れ落ちていることがわかる。従って、当初は、天井まで密封されていたことが予想される。閉塞石は、下部には、大ぶりの石を使い、上部に小ぶりの石と鉄滓を使用している。

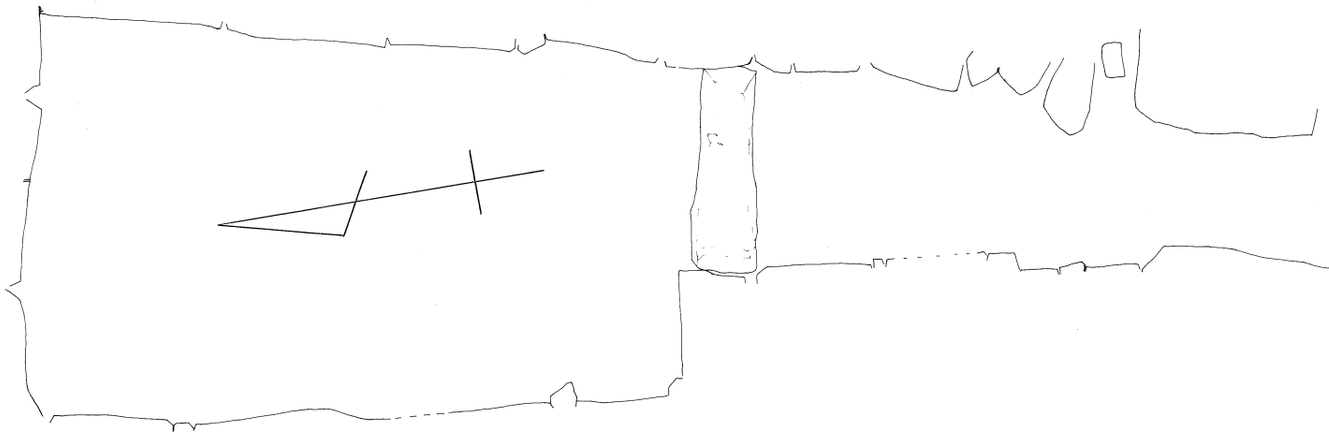
その他、石室自体の掘り方は確認できなかったが、右側壁外部の裏どめ用石積み、左側壁前の隅角外部のすぐ外側に落ち込みがあるようである。

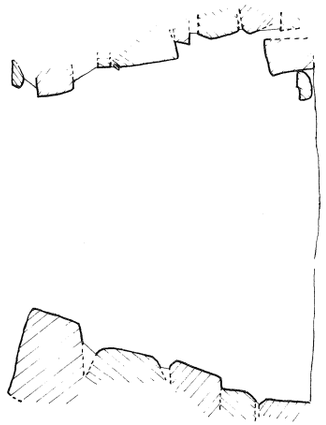
また、石室に使用されている花崗岩は、この古墳の周辺の山からは採集できないで、寸次、横屋あたりでとれる。そこから、どのようにしてあの大きな岩を運

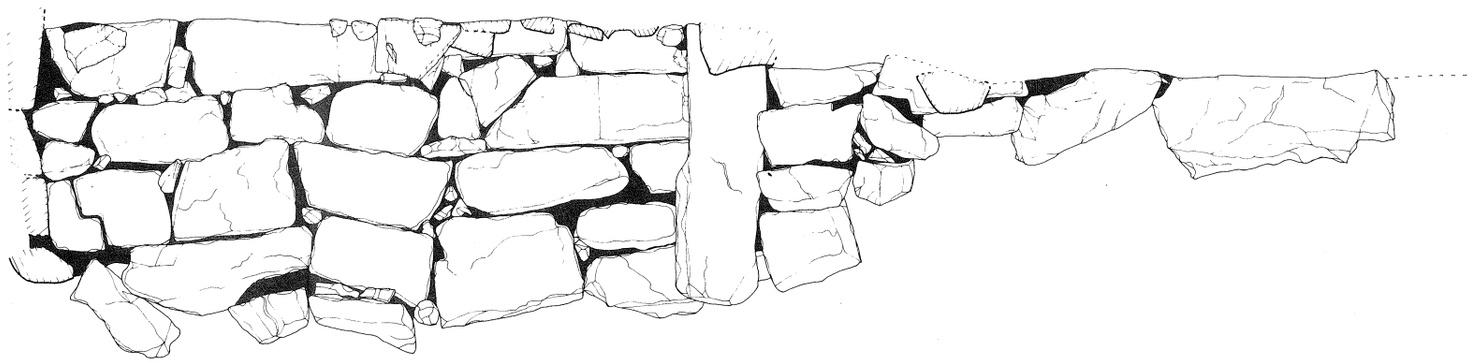
玄室平面・正面図











石室平面及び閉室施設断面・正面図

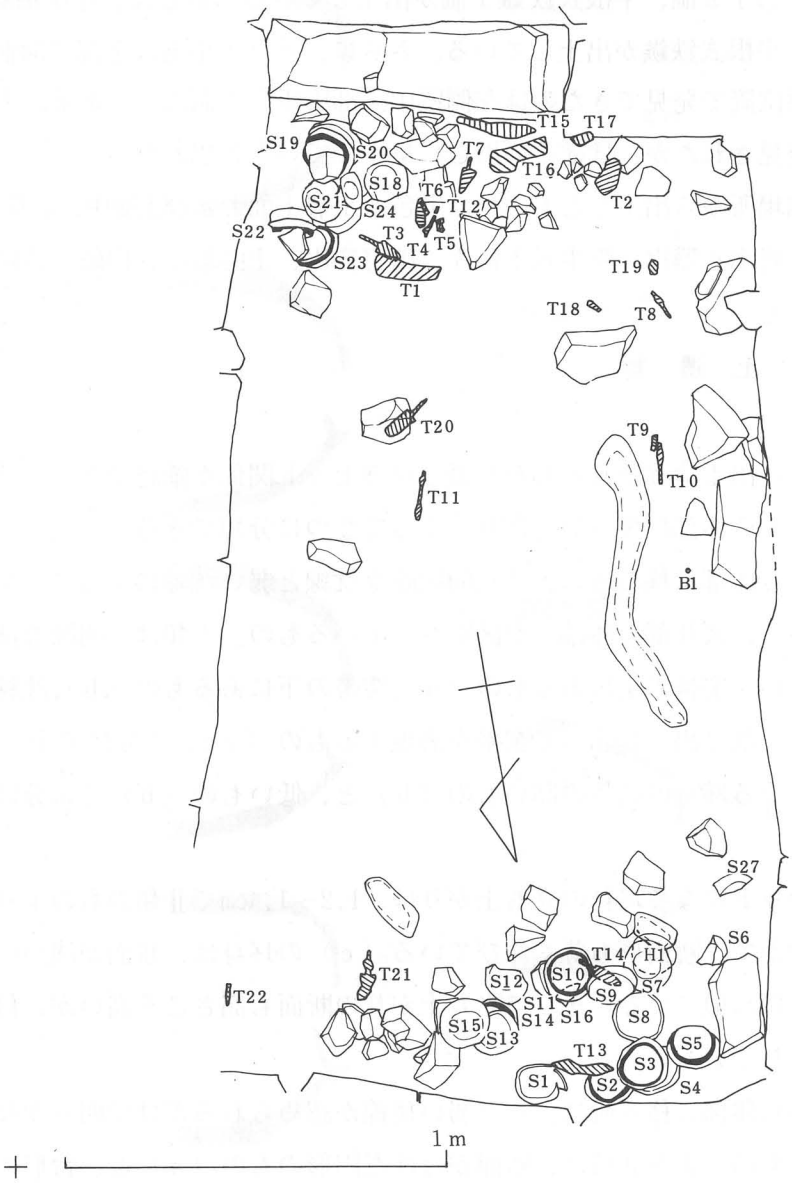
搬したのか、疑問が残る。

③ 遺 物

出 土 状 況　　遺物は、玄室内と石室外から出土した。

まず玄室内において、推積土中からは、縄文土器片、黒曜石片等が出土した。副葬品としては、須恵器の蓋杯、土師器、鉄製品、ガラス小玉が出土した。

玄室内出土状況図



蓋坏は、左奥壁の隅角と玄門右側壁寄りに集中して出土した。前者は蓋と身がほぼ交互に奥壁に沿って前後２列に14個体分置かれていた。後者は、厚さ５cmほどの川砂の敷かれてある下から、ほぼ蓋と身が重ねられて12個体分置かれていた。

土師器は、左奥壁の隅角の須恵器に混じって椀が１個と、玄門右側壁寄りの須恵器に混じって高杯が１個置かれていた。

鉄製品は、ほぼ玄室内全体から出土しているが、玄門部には鎌２個体分、斧１個、器種不明鉄製品２個、平根式鉄鏃３個体分等集中している。また左奥壁隅角の土器に混じって刀子２個、平根式鉄鏃１個が出土している。あとは、左片袖隅角等から尖根式・平根式鉄鏃が出土している。さらに、ガラス小玉は全部で54個分検出したが、原位置で発見できたのは左側壁中央部周辺の１個だけである。あとは排土中より発見されたが、ほぼその周辺に集中していたと思われる。

石室外部の発掘場所から出土したものには黒色系土層上面および土層中、より、石器、黒曜石片、縄文土器片、弥生式土器片、須恵器片、土師器片、白磁・青磁片等、多数出土した。

玄　室　内　出　土　遺　物

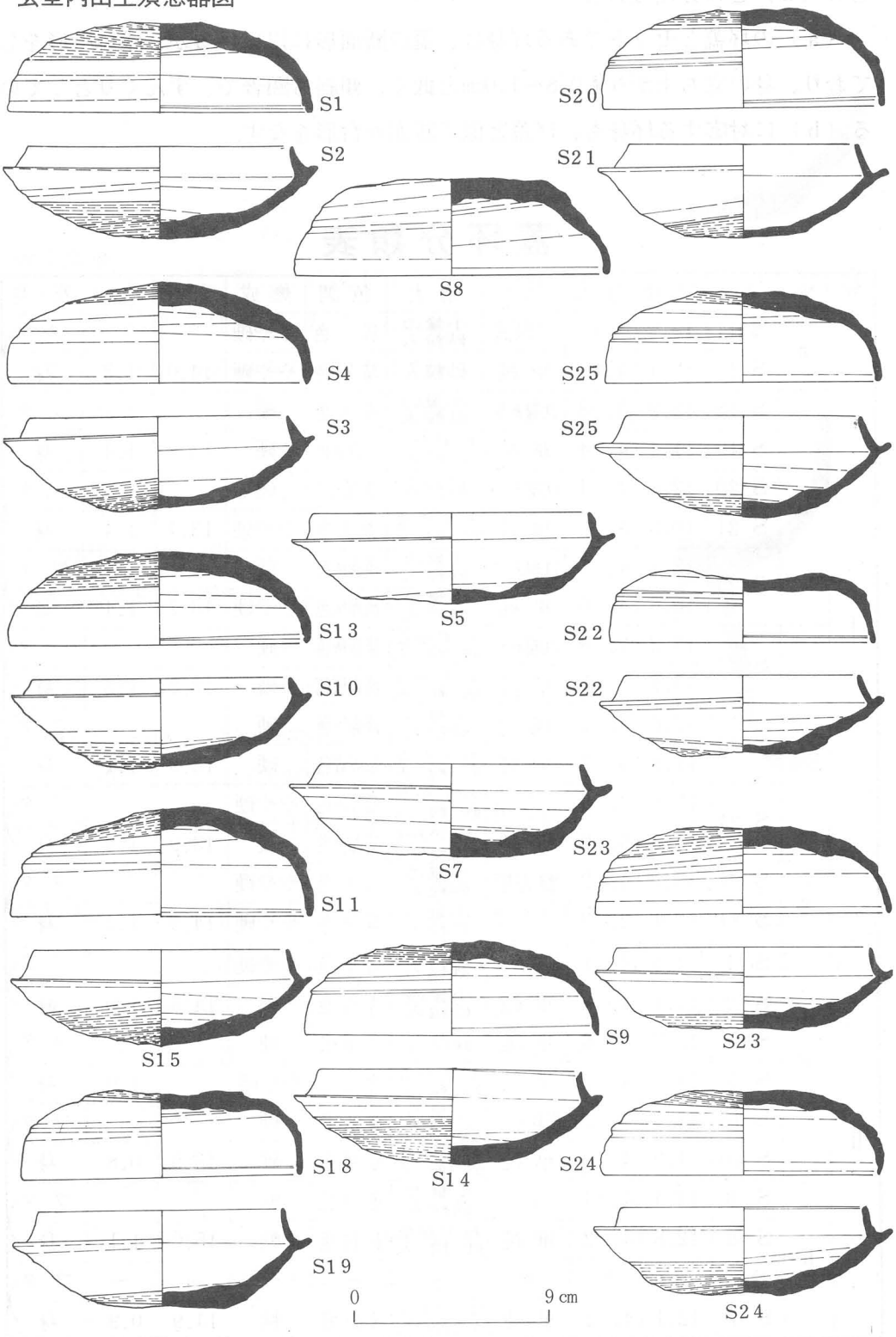
蓋　坏　　出土状況からおおむね蓋と身のセット関係が確認できる。そして坏蓋の天井部から体部に移る形と作りによって２つに分類できる。

Ⅰ類：天井部から体部に移る所に、比較的明瞭な沈線と弱い沈線によって、突帯が表現されていて、天井部と体部とが区別されているもの。Ⅰ類は、明瞭な沈線が、表現されている突帯の上にあるもの（ａ）、突帯の下にあるもの（ｂ）、沈線というより、上下を削り出しによって突帯を表現するもの（ｃ）、に分けられ、（ｂは、セットになる坏身の高さの高いもの（ｂ）と、低いもの（ｂ′）とに分けられる。

Ⅰ類の坏蓋とセットになる坏身の立ち上がりは、1.2～1.4cmでⅡ類のものより高く傾斜もゆるやかで、断面形も薄く伸びている。（ｃ）の坏身は、断面が浅い弓形に近くなり、Ⅱ類に似ている。そして立ち上がりの断面も高さこそ高いが、付け根はずんぐりとしている。

Ⅱ類：天井部から体部に移る所に、ただ弱い稜線が認められるだけで明らかな境が認められないもの。またⅡ類は、断面がほぼだ円形のもの（ａ）と、台形の

玄室内出土須恵器図


S1
S2
S8
S4
S3
S5
S13
S10
S7
S11
S15
S9
S18
S14
S19
S20
S21
S25
S25
S22
S22
S23
S23
S24
S24
0
9 cm

もの（b）とに分けられる。

（a）の坏蓋とセットである坏身は、蓋の断面形に以ているが、浅い弓形をしており、身の立ち上がりも0.8～1.0cmと低く、傾斜も顕著で、ずんぐりとしている。（b）に対応する坏身も、坏蓋と似て断面が台形をなす。

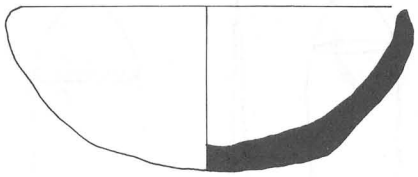
蓋坏分類表

（単位：cm）

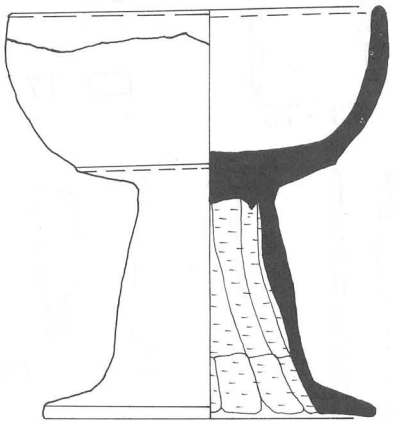
類	No.	No.	口径	器高	口唇内部の手法	胎土	色調	燃成	受部径	立ち上り高	蓋・身
Ⅰ	a	S 11	13.9	4.9	二段式	小量の砂粉入	灰色	やや硬			フタ
		S 15	11.4	4.4	単純	砂粒入	暗灰色	やや硬	14,0	1.3	身
	b	S 18	12.8	3. 8	沈線あり	小量の砂粒入	青灰色	硬			フタ
		S 19	11.4	4. 4	単純	わずかな砂粒入	淡青灰色	硬	13.9	1.4	身
		S 20	12.4	4. 4	沈線あり	砂粒入	淡青灰色	硬			フタ
		S 21	10.3	4. 3	単純	わずかな破粒入	青灰色	やや硬	13.4	1.4	身
		S 25	12.1	4. 1	沈線あり	小量の砂粒入	淡青灰色	硬			フタ
			10.6	4. 6	単純	小量の砂粒入	淡青灰色	やや硬	13.7	1.4	身
	b′	S 22	12.2	2. 9	沈線あり	わずかな破粒入	淡青灰色	硬			フタ
			10.9	3. 5	単純	わずかな破粒入	淡青灰色	硬	13.2	1.2	身
		S 23	13.6	3. 9	沈線あり	小量の砂粒入	淡青灰色	硬			フタ
			11.8	3. 7	単純	わずかな砂粒入	暗灰青色	硬	13.9	1.1	身
		S 24	12.8	3. 8	わずかな段あり	わずかな砂粉入	暗青灰色	やや硬			フタ
			11.3	3. 9	単純	ほんのわずかな砂粒入	暗青灰色	硬	13.9	1.2	身
	c	S 9	13.5	4. 2	整刃形	小量の砂粒入	暗灰色	やや硬			フタ
		S 14	12.1	2. 3	わずか尖る	小量の砂粒入	暗灰色	やや硬	14.2	1.3	身
Ⅱ	a	S 1	14.0	4. 1	凹線あり	小量の砂粒入	暗灰色	やや硬			フタ
		S 2	12.1	4. 2	単純	小量の砂粒入	青灰色	硬	14.5	1.0	身
		S 4	13.7	4. 6	単純	砂粒入	青灰色	硬			フタ
		S 3	11.9	4. 2	単純	わずかな砂粒入	青灰色	やや硬		1.0	身
		S 13	13.7	4. 2	凹線あり	小量の砂粒入	青灰色	硬			フタ
		S 10	11.9	4. 0	単純	わずかな砂粉入	暗灰色	硬	13.9	0.8	身
	b	S 8	14.4	4. 4	アクセントあり	小量の砂粒入	黄白色	軟			フタ
		S 5	12.8	4. 2	単純	わずかな砂粒入	黄白色	軟	15.0	1.1	身
		(S 6)	—	—	—	—	—	—	—	—	フタ
		S 7	12.1	4. 2	単純	ほんのわずかな砂粒入	黄白色	軟	14.9	0.9	身

土　師　器　（椀）　　口縁の直径10.9cm、器高4.3cm、厚さ0.5～0.7cmで丸底の椀形土器である。口縁部は心持ち内弯ぎみにしまり、口唇部は丸い。内面の底部には凹凸がみられる。内面は、横ナデのハケ目調整、外面の口縁部周辺は横ナデのハケ目調整、それ以下は不規則なハケ目調整で仕上げられている。色調は、淡黄褐色へ黄褐色で、胎土は2mm以下の砂粒の混入が認められる。焼成は良好である。

土師器の実測図



H1



H2

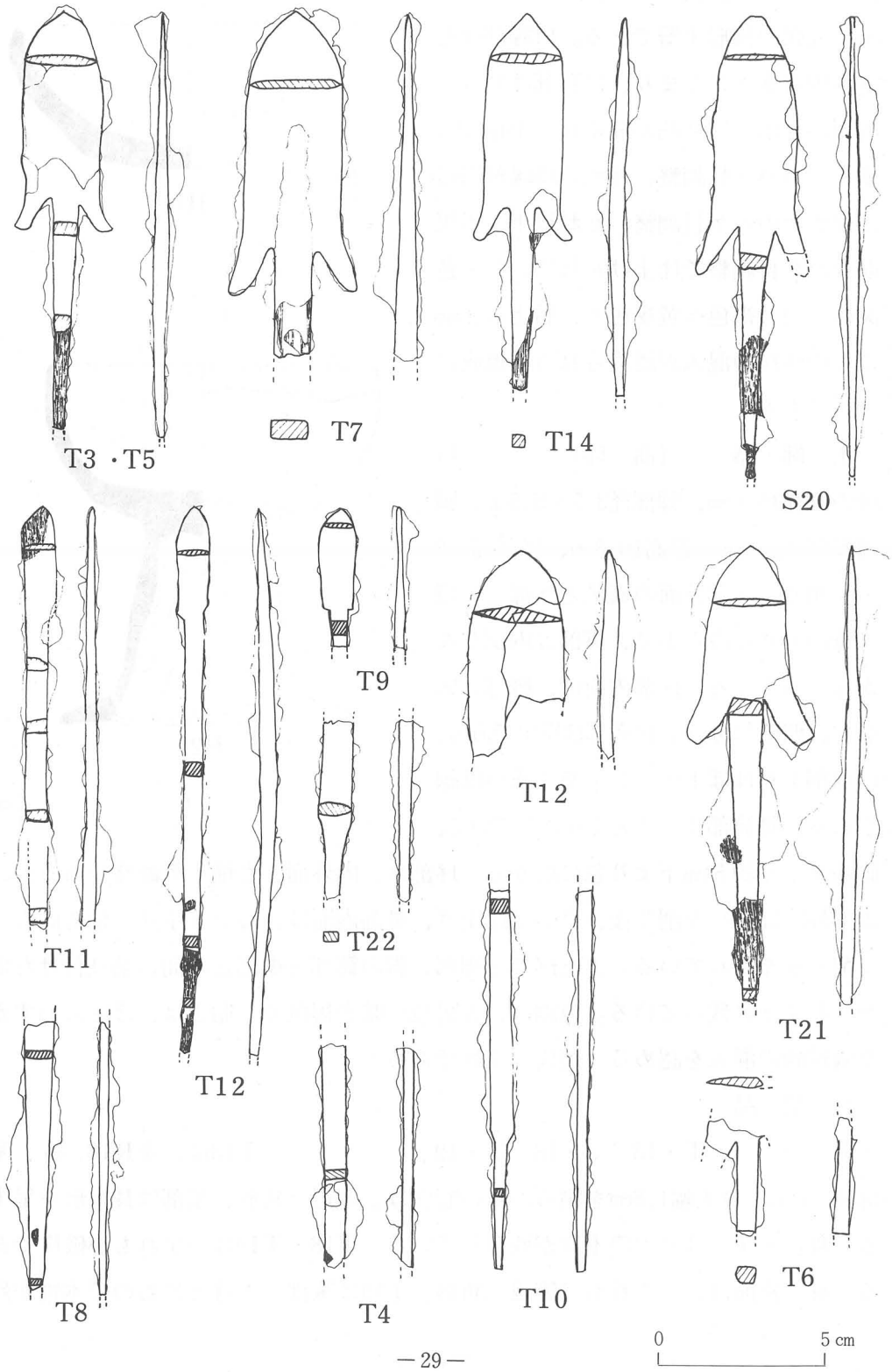
0　5cm

土　師・器　　（高　坏）　　口縁の直径10.0cm、脚部径3.7～5.5cm、脚端裾部径8.8cm、器高10.8cm、坏部高4.8cmを測る。坏部外面の底部と体部との境に稜線と共に段があり、脚部は内反しながら立ち上がる。坏部内面は、脚部と底部が、明確に分かれ坏底部は平坦である。口縁部よりほぼ1cm下に1条の浅い沈線がある。脚筒部は、ずんぐりとしていて、脚基部より約5cm下より急に広がる。坏部は、内外面とも横ナデ調整であるが、脚部外面は、ヘラ削り後、磨いて仕上げ、脚部内面は、ねじり手法と横方向のヘラ削りがなされている。また坏部と脚部、脚の筒部と裾部との間に貼り付けた痕が、わずかに残っている。色調は、赤褐色～暗赤褐色で、胎土は、ほんのわずかな微粒砂の混入を認める。焼成は良好である。

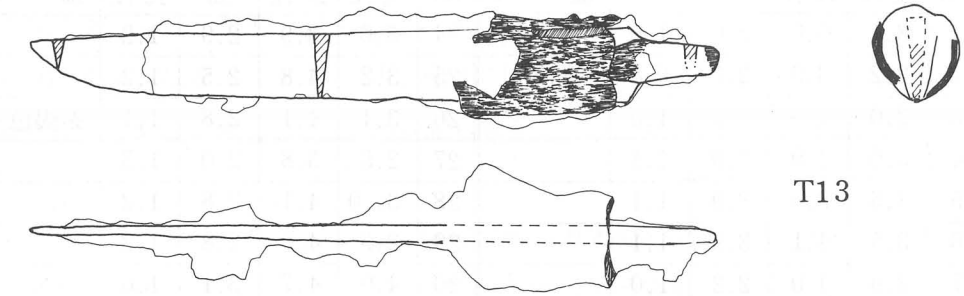
鉄　製　品

刀　子　（T・13　T・18　T・19）　　T13は、全長18.3m、茎部長2.0cm、最大幅1.8cmを測る。身の断面は二等辺三角形、茎部は長方形を呈する。身の基茎にはサヤの木質が残存している。T18・T19はいずれも小破片である。身の断面は、いずれも二等辺三角形、T19は茎部と刀身とのもので木質が残

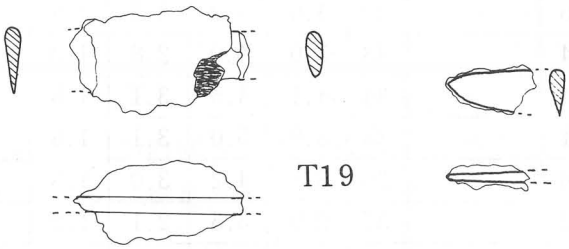
鉄製品の実測図 (1)



鉄製品 (2)

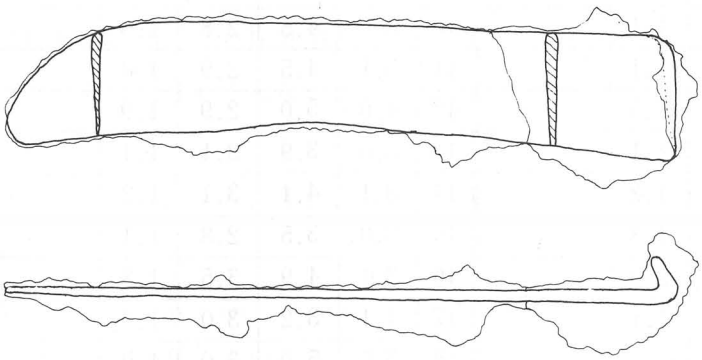


T13

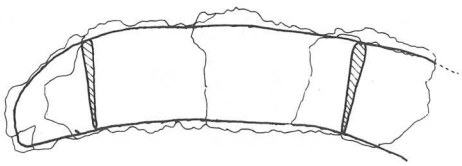


T18

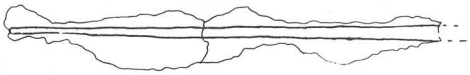
T19



T16



T17



0 5 cm

ガラス小玉計測表

（単位：mm）

No.	短径	長径	高	孔径	備考	No.	短径	長径	高	孔径	備考
1	3.1	5.0	2.0	1.0		24	3.0	3.9	2.9	1.2	
2	2.2	3.0	3.0	0.8		25	3.2	4.8	2.5	1.2	
3	3.0	4.0	3.2	1.0		26	3.1	4.1	2.8	1.1	赤褐色
4	3.0	4.9	2.9	1.1		27	2.5	3.8	2.0	1.5	
5	3.5	3.0	3.0	1.1		28	3.0	4.1	2.8	1.2	
6	3.5	4.1	3.5	1.1		29	2.9	4.0	2.8	1.2	
7	2.9	4.0	2.2	1.0		30	4.0	4.7	3.1	1.6	
8	2.9	4.0	2.9	1.0		31	4.0	5.0	4.0	1.3	
9	2.9	4.0	2.5	1.5		32	4.0	5.0	3.2	1.9	
10	3.0	3.9	2.9	1.4		33	3.0	4.0	2.8	1.3	
11	3.0	4.1	3.0	1.4		34	4.1	4.5	3.1	1.8	
12	3.0	4.2	2.9	1.1		35	3.9	5.0	3.1	1.6	
13	3.0	4.0	2.9	1.6		36	3.1	4.2	3.0	1.8	
14	3.2	4.9	3.0	1.2		37	2.9	3.5	2.1	1.2	
15	3.2	4.2	2.0	1.8		38	4.0	5.9	2.9	2.0	
16	3.9	5.0	3.1	1.8		39	3.1	3.8	3.1	1.8	
17	3.0	3.9	3.0	1.1		40	3.0	4.5	2.8	1.6	
18	3.0	3.8	2.1	1.1		41	3.1	4.5	2.9	1.8	
19	4.0	5.0	2.0	1.5		42	4.0	5.0	2.9	1.9	
20	3.0	3.9	3.0	1.1		43	3.0	3.9	3.1	1.1	
21	3.0	4.0	3.0	1.2		44	3.1	4.1	3.1	1.2	
22	3.2	5.0	2.9	1.8		45	3.0	3.5	2.8	1.1	
23	4.0	5.8	3.0	2.0		46	3.1	4.9	3.5	1.8	
B1	3.0	4.0	3.0	1.1		47	2.1	3.2	3.0	1.0	
						48	3.5	5.0	3.0	1.9	

存している。

鎌　（T・16　T・17）　T16は、全長10.0cm、最大幅3.2cmで断面はほぼ二等辺三角形を呈する。1.3cmほどを直角よりやや内側に折り曲げて柄をつけるようになっており、刃は内側に付き直線よりややカーブする。T17は、刀部の破片である。現存最大幅2.6cmを測る。刃は内側に付き、やや内側にカーブしている。

斧　（T・2）　全長10.3cm、刃先幅5.3cm、袋部径4.5cmを測る。腐蝕が激しく復元が難しいが、だ円形の柄を挿入する袋部を有するものであろう。

鏃　これは、平根式鏃と尖根式鏃とに分けられる。

平根式鏃　（T・3　T・5　T・7　T・12　T・14　T・20　T・21）身の平面形は、先端が三角形をなすものと、両側からゆるくカーブして突き当たるものがある。身の断面は、両丸造りで、篦被部は長方形をなしている。篦被はしだいに細くなる。篦被部には木質の残存がみられる。

尖根式鏃　（T・19　T・11　T・12）　ほぼ身の長さ3.0～3.5cm、幅1.0cmを測る。関を持ち横断面が長方形の篦被部が続き茎部にいたる。身の断面には両造りと片丸造りのもの（T11）とがある。篦被部や茎部が欠損しているため全長はわからないが、T12はほぼ完形に近いもので現存長16.5cmを測る。

その他、T4、T8、T10、T22は、鉄鏃の篦被部および、茎部にあたる小片である。

不明鉄製品　（T・1　T・15）　T1は、長さ19cm、幅4cm、断面が角の丸い二等辺三角形を呈したものを片面から、厚さ0.3cmの板状のものが覆っている。

T15は、長さ14cm、直径3.5cmの丸いもので、腐蝕が顕しい。

ガラス製小玉　おおむね直径0.3～0.6cm、高さ0.2～0.4cmを測るが、形はまちまちで色は、淡青色～紫青色、淡黄緑色と青色系が大部分をしめ透明および半透明をなしている。断面が横に細長いだ円形のものと、方形に近いだ円形のものとがある。(計測表参照)

その他、玄室内堆積土中・石室外出土遺物の主なものを述べておく。

縄文土器　玄室内堆積土・石室外の黒色系土層上面および土層

中より多数の小片が出土したが、大きく分けると、(1)外面条痕地土器、(2)無文粗面土器、(3)無文磨研土器になる。(1)は、幅 0.2 cmの比較的深い凹線が器面全体に横走している。胎土は、大きな砂粒の混入が認められ、色調は、黄褐色～褐色のもの。(2)は、幅2.0～1.0cmの削り痕の凹凸が顕著なもので、色調が暗茶褐色、胎土は、砂粒を多く混入している。(3)は、器壁 0.6 cmわずかに内反する淡茶褐色の小片。胎土は、小さな砂粒を混入しているが目立たない。他に、幅 2.0 cmの 2 条の凹線と突帯をもつものがあり、突帯上端は丸くもり上がっていて、器面は、空帯との間に「U」字状のすき間を作って立ち上がる。色調は淡灰褐色をなし、胎土は小さな砂粒がわずかに混入されているが目立たない。

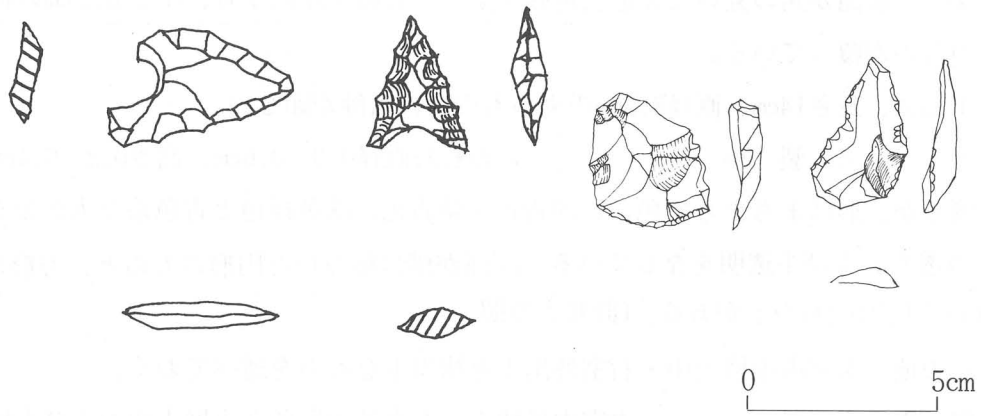
その他、上げ底ぎみの底部が出土している。

石　器　類

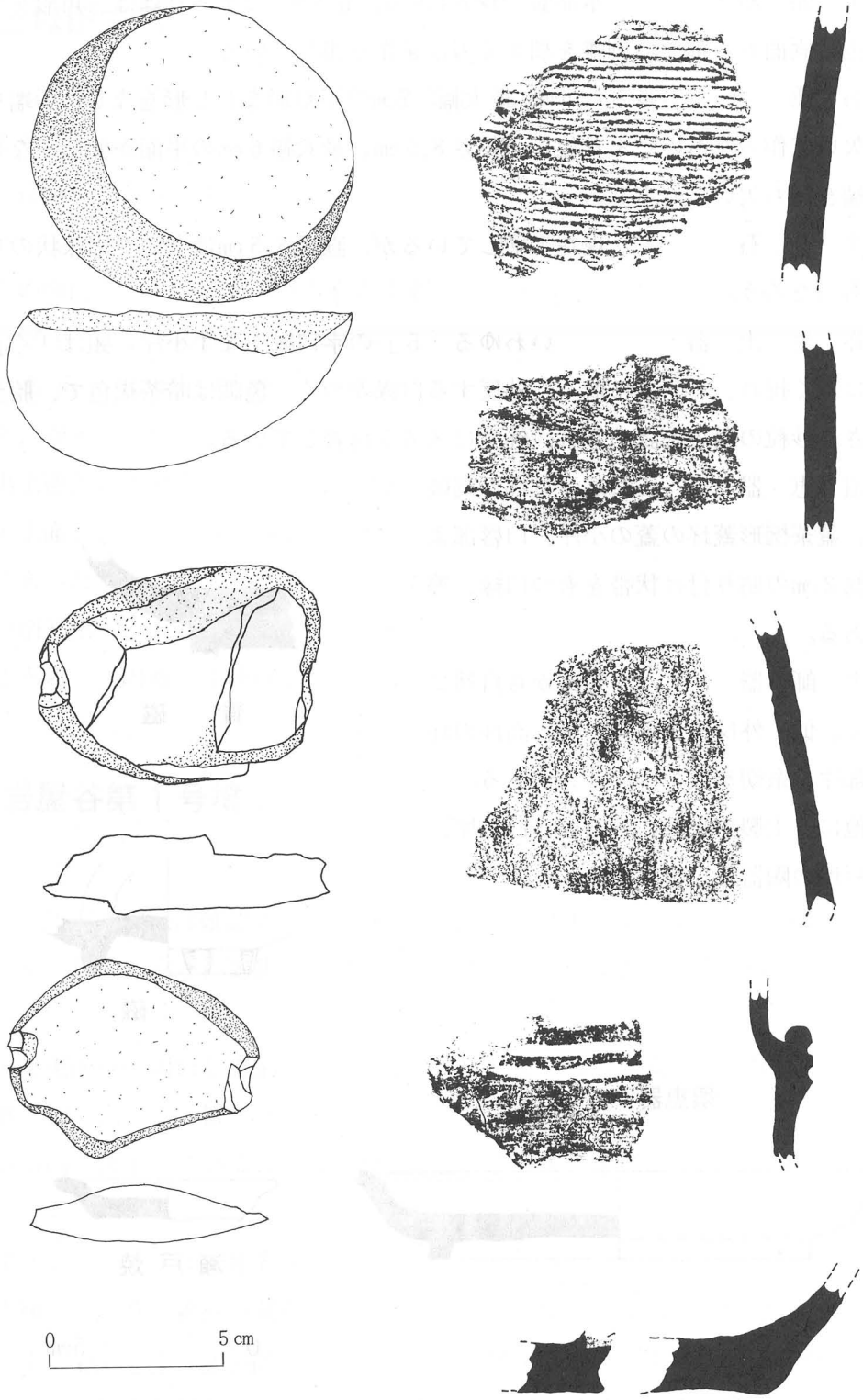
石　鏃　　黒曜石製。長さ1.7cm、最大幅1.2cmで平面が二等辺三角形のもの。丁寧に作られている。基部には三角形の択り込みがある。他に長さ 2.2 cm最大幅約1.7cmのものがあり、基部に半円形の深い択り込みがある。

石　匙　　黒曜石製。幅 3 cmで外にゆるくカーブする面に片方から細く剝離を加えて刃部を作り出したもの。他に、幅 1.8 cmのほぼ直線的な面に両面から剝離を加えて刃部を作り出したものがあり片面は荒く、もう片面は、比較的細かく剝離を加えている。

石器実測図



縄文土器、石器



尖　頭　器　　水晶製で長さ4.0cm、最大幅2.2cmありほぼ三角形を呈し両辺に両面から細かい剝離を加えて刃部を作り出している。

石　錘　　長さ7.0cm、最大幅5.7cmの不整形なひし形をなし、両端を打ち欠いて作ったものがあり他に、長さ8.5cm、最大幅6cmの平面が卵形をなし、両端を打ち欠いたものもある。

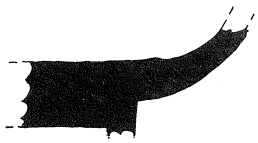
す　り　石　　現在半壊しているが、直径8.5cmほどのだ円球状のものであったろう。

弥　生　土　器　　いわゆる「5」の字口縁をなす小片。頸は「く」の字に鋭く折れ、わずかに低く、外反する口縁がつく。色調は暗茶褐色で、胎土は小さな砂粒の混入が認められ、外面にススが付着している。

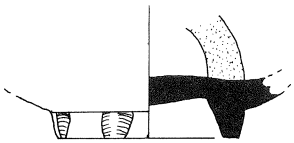
須　恵　器　　高台付坏か椀破片、蓋茶椀形蓋坏の蓋の小片、口唇部より幅2cmの貼り付け状帯をもつ口縁、等がある。

土　師　器　　頸部から自然に強く、低く外反する単純口縁、高坏の坏底部片、糸切り底の小片、等がある。

他に、土製支脚片、青磁片、白磁片、瀬戸焼の陶器片、等がある。

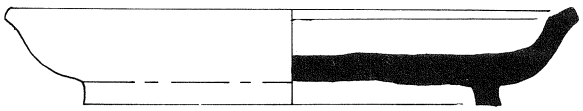


青　磁



白　磁

須恵器



瀬戸焼

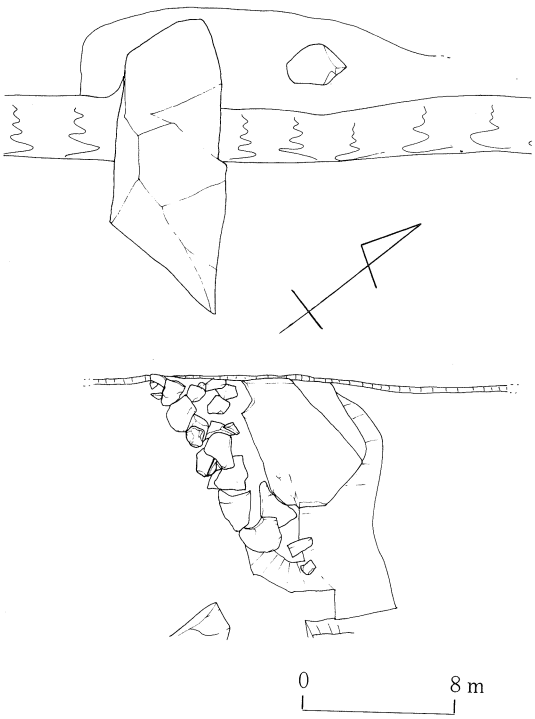
0　　5cm

上塚田古墳

墳丘、石室とも今回の調査で明確にできなかった。但し、現在水田中に立っている花崗岩の石は石室の一部であったと思われる。

その理由として、①大ぶりの石が1個発見できたこと。②残存する石基部で土層の違う線がほぼ石と直角に認められたこと、があげられる。

出土遺物は、第4トレンチの黄褐色砂質土上面より、高台付の須恵器片1片のみであった。直径3.6㎝、高さ0.2～0.4㎝の削り出しによる高台をもち、器種は坏であろう。内面には緑釉がかかっている。



岩屋谷第1号墳

墳　丘

墳丘の築成方法は確認できなかった。大きさは、①第1トレンチの石室より約2m東の落ち込みと、②北側の地形から、約12～14mの円墳であったと思われる。

石　室

現在東南東に開口し玄室の3分2のみ残存している。花崗岩を使用している。

遺　物　出　土　状　況

石室内と落下している天井石の脇より甕の小片等の須恵器片、陶器片が出土した。

第2トレンチでは、地表面下50～70㎝で磁器片3個、95㎝下で須恵器片、黄褐色土層上面から、蓋杯の蓋の小片、甕の破片が7片出土した。

第1トレンチでは、第2層の青灰色シルト層より須恵器片と土師器片が2個だけで、第3層の茶褐色シルト層上面および土層中よりスス付着の甕、土師器の糸

切り底杯片と須恵器の高台付椀片などが出土した。

石　室　出　土　須　恵　器

口　縁　部　　直径推定21.6cmで頸部から大きく外反し、幅1.5cmの帯状の返しを有する。外面には自然釉がかかっている。

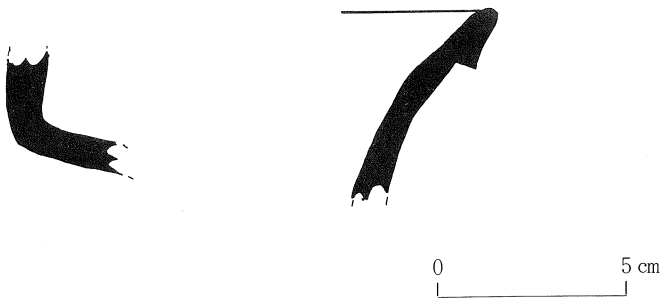
胴　部　　厚さ0.7～0.9cmの小片だが、外面はタタキ目の上に平行文をもつ。内面は、円状の当て板文が認められるが浅く、一部消している。

他に、器種不明だが、外面青黒色をした回転ロクロ作りの須恵器片、回転糸切り底をもち内面にあめ釉のかかった小皿の陶器等がある。

石室前第1・第2トレンチ出土須恵器

甕　の　体　部　　外面にタタキ目をもち、内面に円状の当て板文を認めるが浅く一部消去している小片と、外面にタタキ目をもち、内面に当て板文を顕著に認められる小片（第1・第2トレンチ出土）と、外面に円状の当て板文をもち、内面にタタキ目文をもつもの（石室前出土）がある。

他に、回転ロクロ作りの須恵器片、高さ0.7cm、幅0.6cmの貼り付高台をもつ須恵器片、外面にはススが付着した内外面刷毛目調整の厚さ0.2～0.4cmの甕の土師器片、糸切り底をもつ土師器片（ここまで第1トレンチ出土）、直径4.3cm、高さ0.8～0.9cmの高台をもつ白磁片内外面のみ釉が塗ってあり高台内部は淡褐色をなす。他に青磁片（ここまで第2トレンチ出土）がある。



岩屋谷第1号墳出土須恵器

岩屋谷第２号墳

墳丘は、発掘前すでに消欠していたので不明。この古墳の大きさも確認できなかった。石室は、現在、径５ｍ、高さ1.8ｍほどの中に天井石を最上段に置いた形で残存している。

出土遺物は、伐採の時、この石組みの中から表採した須恵器片が１片ある。甕の体部の破片である。厚さ1.1㎝で、ほぼ直線的な断面形をもつ。外面は磨滅しているがタタキ目が認められるし、内面にも深い円状の当て板文と平行凹線が認められる。

塚田古墳

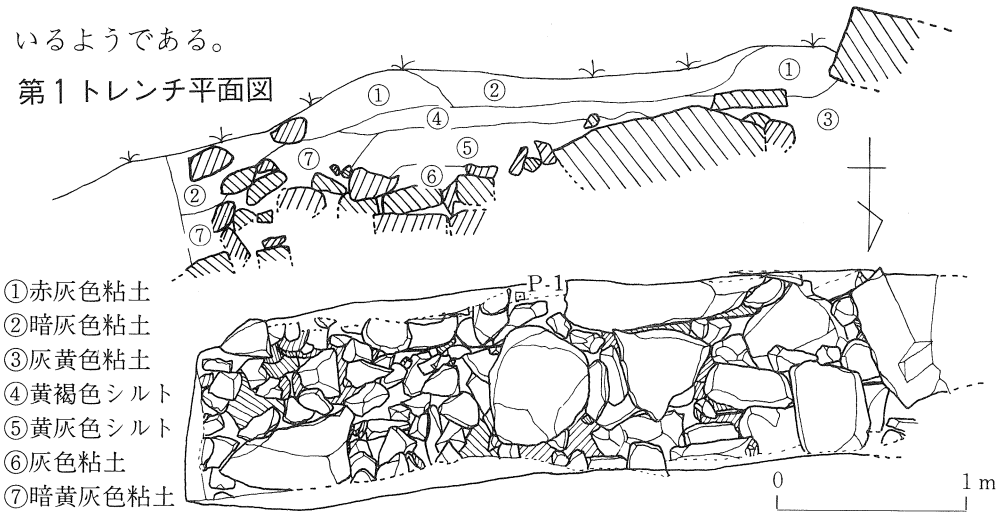
墳　丘

この古墳は築成当時、川原の地表であった黄色砂層を掘り込んで石室を構築し、さらに境界を整形し盛土を行って築成している。また古墳の大きさは、①第１トレンチでの羨道部入口の確認　②第３トレンチの黄色砂層の落ち込み　③第４トレンチの黄色砂層の落ち込みから、径約13mほどの円墳であると推定した。

石　室

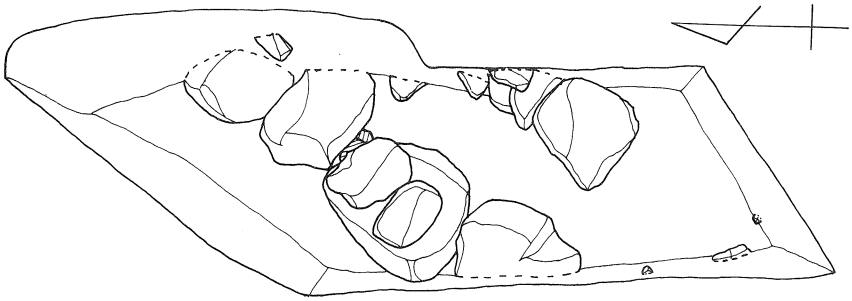
未調査だが現在では、ほぼ東西方向の長さ約８ｍ、玄室部約５ｍ、玄室内幅1.2ｍ（床面はもっと広いと思われる）、羨道部幅0.5ｍほどの偶丸の両袖型横穴式石室で、小口積みの立派なものである。石材は安山岩を使用しているが、なかには花崗岩もある。羨道部には両側壁と天井石の転落もあるが、閉塞施設も残存しているようである。

第１トレンチ平面図



①赤灰色粘土
②暗灰色粘土
③灰黄色粘土
④黄褐色シルト
⑤黄灰色シルト
⑥灰色粘土
⑦暗黄灰色粘土

また第５トレンチでは、北東に伸びる幅0.7m、高さ0.6mの石列を検出した。第３トレンチ、第４トレンチでの不規則な石組みではなく、明らかに人為的な石組みである。この石列は黄色砂層にのっている。古墳に関係するものかどうかは不明である。



第５トレンチ石列実測図

0　　1m

遺　物　出　土　状　況

第１トレンチの羨道部内石組み上面より須恵器の甕片が２片出土した。

第３トレンチの暗茶褐色土層内より縄文土器片が10数片、黒曜石片１、また須恵器の甕の頸部が出土した。

また伐採の時、須恵器の甕片２片を石室の石組みの間から採集した。

その他、第５トレンチの石列の比西側の暗赤褐色～暗黄褐色、暗褐緑色土層中より、須恵器の甕片が９片、縄文土器片が１片出土した。

羨道部石組み上面出土須恵器

甕　片　　断面厚1.1cmで外面にタタキ目、内面に円状の当て板文を認めるが、きわめて浅く一部消している小片と、厚さ0.6cmで外面にタタキ目、内面に浅い円状の当て板文をもつ小片があり、これは外面に自然釉が認められる。

第３トレンチ出土須恵器

甕　片　　幅３cmほどにクシ工具による波状文があり、そ

の上下に浅い凹線が認められる。厚さ1.0cmで復元すれば、かなり大きなものになると思われる。外面に自然釉が認められる。

石室外石組み表採須恵器

甕　片　　頸から肩部へは、ほぼ直角に折れ曲がり、肩の張った、体部になる。外面の頸部は横ナデ、胴部はタタキ目が認められ自然釉がかかっている。内面は頸部下端までは横ナデ、それ以下は浅い円状の当て板文を認める。

第5トレンチ石列周辺出土須恵器

甕　片　　厚さ0.5～0.8cmで、外面にタタキ目、内面に顕著な円心円の当て板文をもっている。色調は、淡青灰色～暗青灰色である。

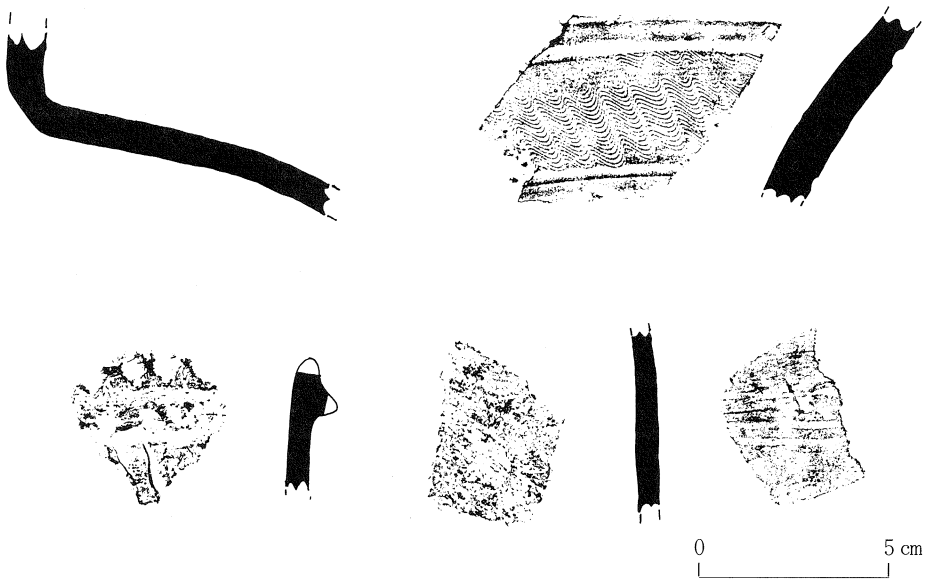
自然釉の認められるものが2片あった。

第3トレンチ出土縄文土器

①口縁直下に断面三角形で刻み目つきの突帯をもち、口唇上面にも刻み目をもつ粗面土器。色調は褐色だが、外面は黒ずんでいる。

②色調は茶褐色を呈し、外面にススが付着している。内面条痕文土器。

他に無文粗面土器等がある。



塚田古墳第3トレンチ出土土器実測図

Ⅳ　小　　結

座王古墳の築成時期は、副葬品の須恵器の蓋杯から推定できるが、「遺構と遺物」の項でみたようにⅠ類とⅡ類とがある。いま山本清氏が山陰の須恵器編年の中で6つに分けているのに比定すれば、Ⅱ類は第5式に、Ⅰ類は第3式および第4式に刻当する。よってⅠ類は第Ⅲ期に、Ⅱ類は第Ⅵ期になる。つまりこの古墳は、第Ⅲ期に築成され、少なくとも第Ⅳ期まで墓として使用されていたことになる。しかし、その間の実年代幅がどれだけなのか不明だし、追葬の証拠になるものが他に確認できないことから、2回以上の追葬が行なられた可能性があるということがいえよう。

しかし、この古墳の築成時期をおさえる事の意義は別にもう1つある。それは、閉塞施設、裏どめ、側壁のはめ込みに、挙大、人頭文のおびただしい鉄滓が石と共に使用されていたからである。それらの鉄滓は後世による混入とは考えられず明らかに古墳築成時に使用されている。仮りに2回以上の追葬が行なわれたとしても、それは古墳築成時に、この周辺で鉄生産が行われていたことを否定するものではなく、逆に追葬の最終時期に至るまで鉄生産が継続していた可能性を物語っているようである。この座王の谷の1つに「金子谷」というあざ名の場所があり、鉄滓が多数出てくるようである。

出雲地方において鉄生産を証明する考古学的資料はいまのところ少ないが、最も古い文献は、8世紀の「出雲国風土記」である。飯石郡の波多小川、飯石小川の項に「鉄あり」と出てくるし、仁多郡においては「諸郷より出す所の鉄、堅くして、尤も、雑具を造るに堪ふ。」とあるように、郡一帯で鉄生産が行われていた事がわかる。しかし、それらの鉄生産の開始時期、および内容については、未だ不明である。

この座王古墳より出土した鉄滓は、そうした出雲地方における鉄生産の始まりを古墳時代後期、山陰の須恵器編年第Ⅲ期まで溯らせることが可能であることを示している。

また座王古墳の発掘調査で出土した遺物から、この他には縄文時代後期終り頃から晩期にかけて、さらに奈良・平安時代を経て中世に至るまで長く人々の生活

の舞台であったことがうかがえる。

次に上塚田古墳築成時期は不明である。

岩屋谷第1号墳は須恵器の甕片からしか推定できないが、古墳時代後期、山陰の須恵器編年第Ⅲ期ないし第Ⅳ期頃の築成であろう。

岩屋谷第2号墳は築成時期は不明である。

塚田古墳は、羨道部石組み上面出土の須恵器の甕片から岩屋谷第1号墳とほぼ時期的に同じ頃のものであろう。さらに塚田古墳の場合は、継続的にその周辺が人々の生活の依り所になっていた事がわかる。また縄文時代晩期頃すでにこの谷には生活が始まっていたようである。

以上のことから、ほぼ山陰の須恵器編年第Ⅲ期の同じ時期に、今回の発掘調査対象であった、横穴式石室を内部主体とする古墳が築成されていることが解る。つまり、「位置と環境」の項でみた各々の地域が同時平行的に1つのまとまった社会・生産単位として成立している事になるであろう。そしてその中の座王古墳を築成した社会・生産単位の集団は鉄生産を行っていた事が推定される。しかし、相互の関係やそれらが1つの大きなまとまりを形成していたかどうかは不明である。

ところで、「位置と環境」の中で赤屋地区の「上の台」古墳群を紹介しておいた。標高300mの高地に数十基もの古墳群の群集、それも横穴式石室を内部主体とした古墳が多い。この「上の台」古墳群の周辺からも鉄滓が多数出土するという。実際に近代においてもたたら生産が行われていたという。「赤屋」という地名は、そうした鉄生産の名残りであろう。しかし標高300mの「上の台」に数十基もの古墳が築成される、その生産力と社会形態がどのような生産基盤に求められるかという問題に対して、今、鉄生産という可能性が考えられるに至っている。

しかし、奈良時代、仁多郡一帯で鉄生産が行なわれていたという雲南地方において、これだけの古墳群が見当たらない。それは、雲南地方の鉄生産開始時期が古墳時代の後からであるか、鉄生産の生産形態の差違によるのか等が考えられる。もし、「上の台」古墳群の形成主体が鉄生産を生産基盤としていたとしたら、かなり大きな、また集中的な生産形態を行っていたのではないかと思われる。

ところで、もう1つ問題がある。「位置と環境」で触れたが、この伯太町では母里以北と井尻以南とでは遺跡の様相が異る。母里以北では縄文時代から弥生時

代（中期頃から始まるらしい）に入っていき、そして古墳築成時代に発展している。しかも方系墳、横穴も多数作られている。

しかし、井尻以南において弥生土器出土例は現在のところ熊野神社所蔵の弥生時代から土師器移行期の土器と、今回の調査で出土した「5の字」口縁の弥生土器しかない。つまり、縄文時代からひとびとに弥生時代終末期を経て古墳築成期に移行していくが、母里以北での弥生時代中期併行期における井尻以南での生産活動の内容、および発展の様相が考古学的に明らかにならない。また古墳時代でも横穴式石室を内部主体とする古墳は、母里以北には皆無である事から、「母里から井尻へ」という伯太川をさかのぼる変遷だけでは説明できない。鳥取県の法勝寺川流域との相互関係を考えていく必要がある。それは、伯太町の井尻以南か古墳時代後期において、いわゆる「出雲」と呼ばれるまとまりの地域内であったか「伯耆」と呼ばれる地域内であったのか、第三の独自な地域を形成していたのかということも関連して大切な事であろう。これは、横穴式石室の分布や築成方法なりの比較、さらに鉄生産の地域的発展と変遷の解明なりをして、今後明らかにしていくべき問題であろう。

文　献

(1) 伯太町誌

(2) 「山陰の須恵器」山本清氏

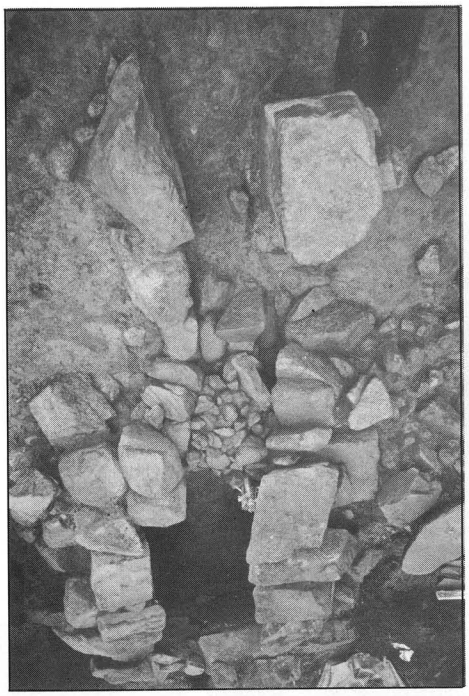
(3) 「出雲国風土記」加藤義成氏

なお、座王古墳出土の鉄滓の分析ができなかったのでその結果が記載できないことをおわび致します。

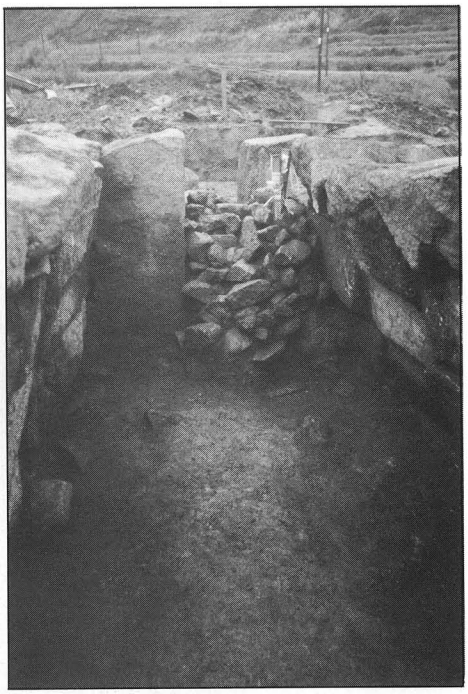
図　　版

座王古墳遠景

座王古墳近景



閉塞施設全景

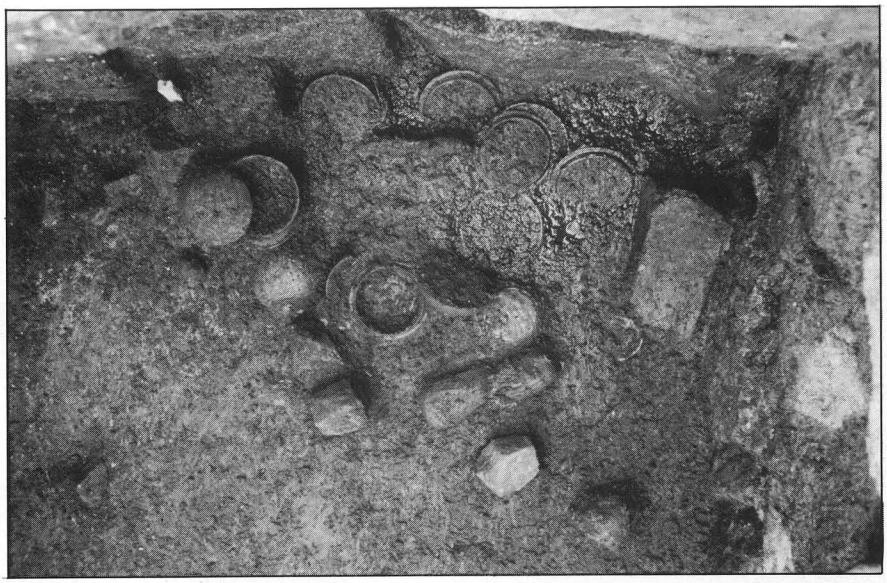


閉塞施設

閉塞施設景

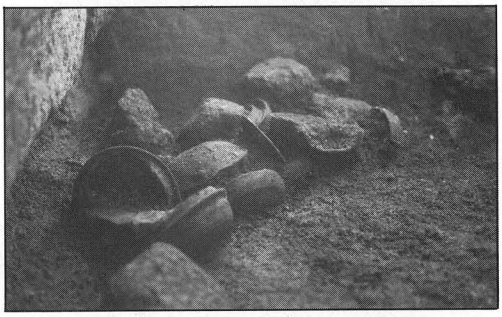
◀玄室内遺物出土状況

玄室内遺物出土状況



出土状況

▶遺物出土状況興壁正面



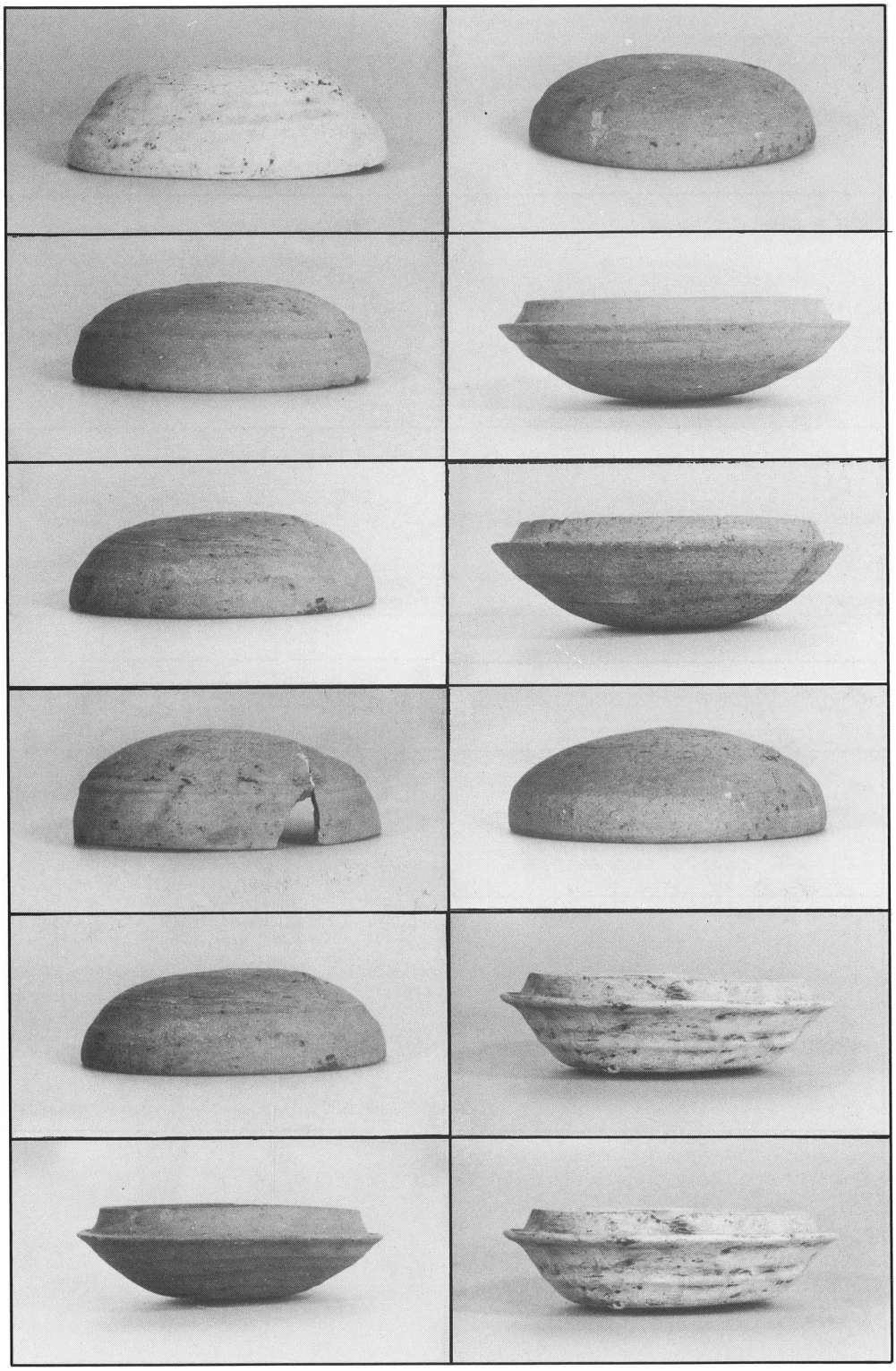
◀遺物出土状況前壁正面

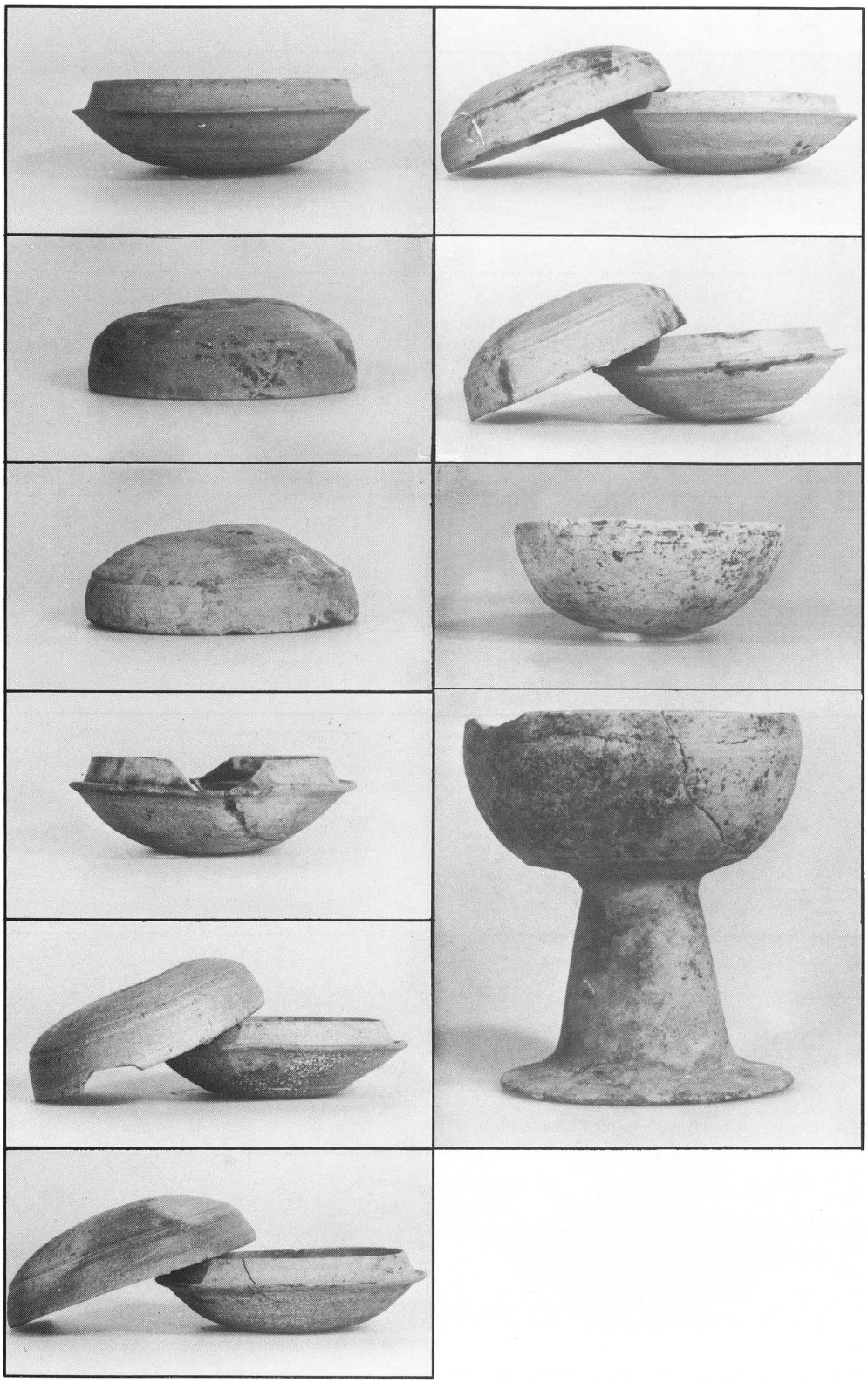
遺物出土状況前壁平面

石室全景(正面)

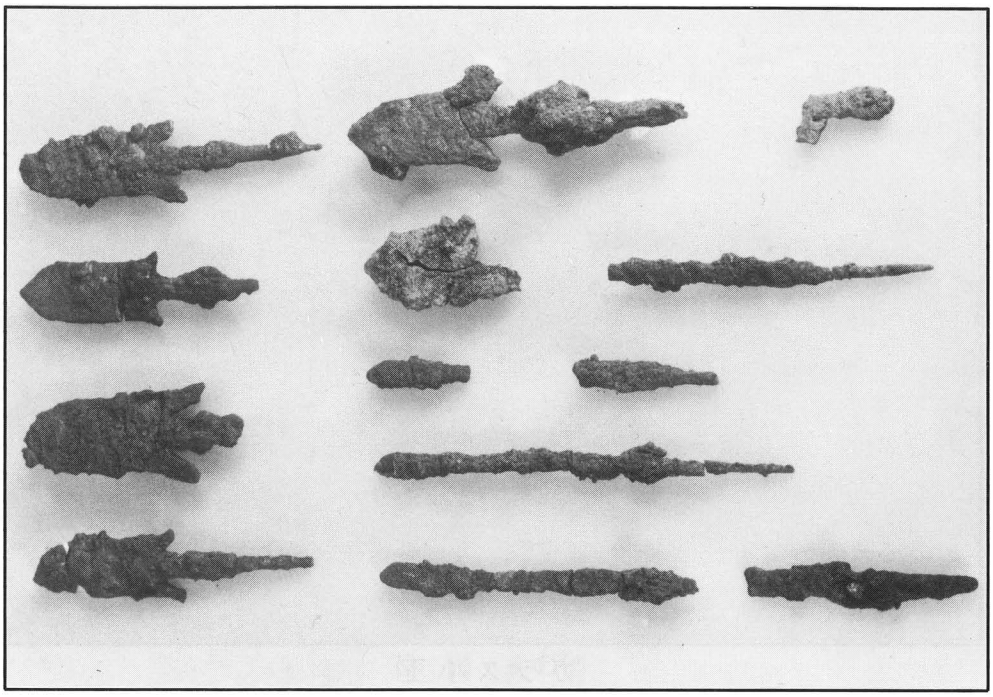
玄室部石組み状況

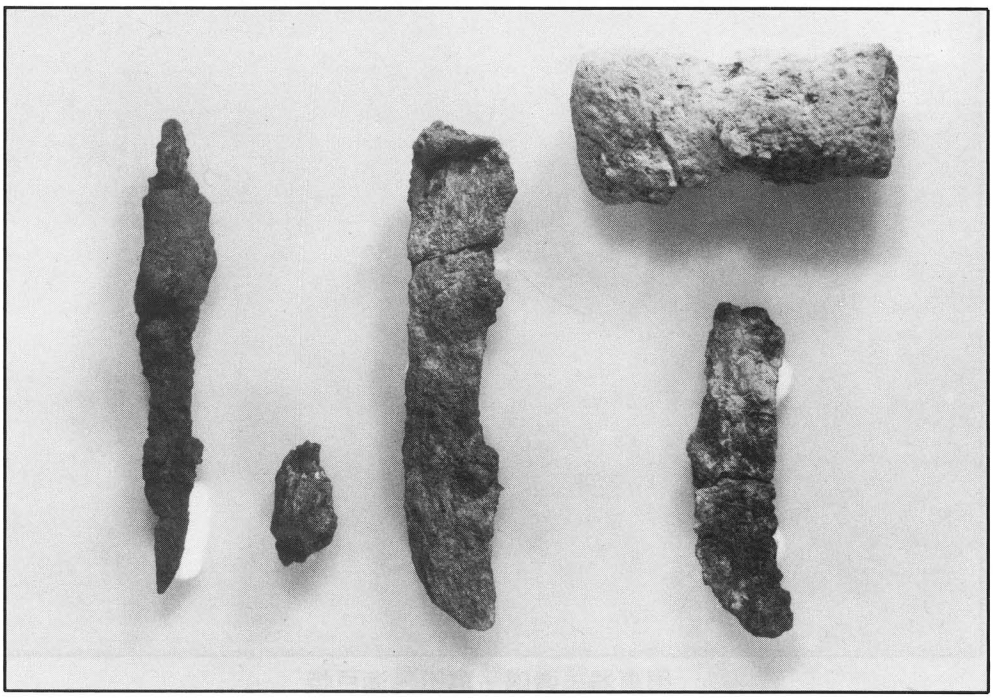
出　土　蓋　坏

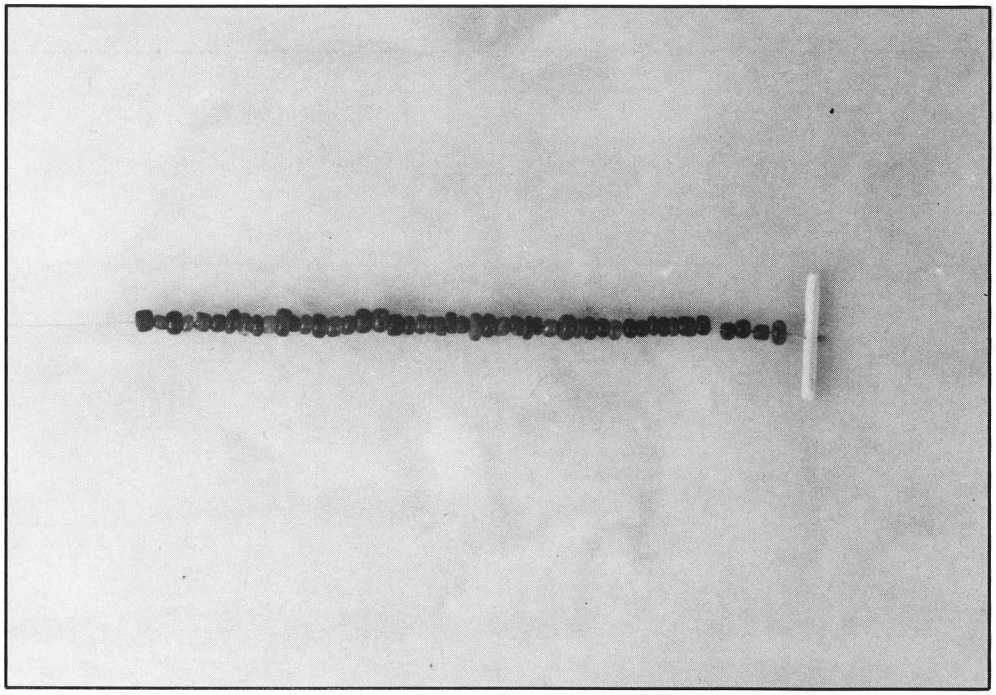




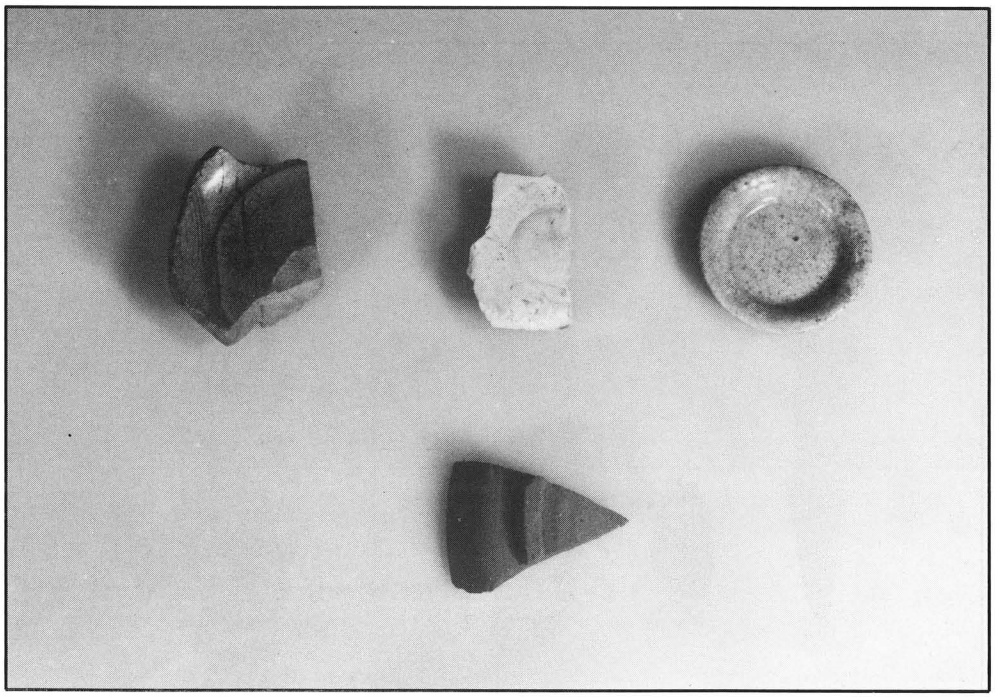
鉄　製　品



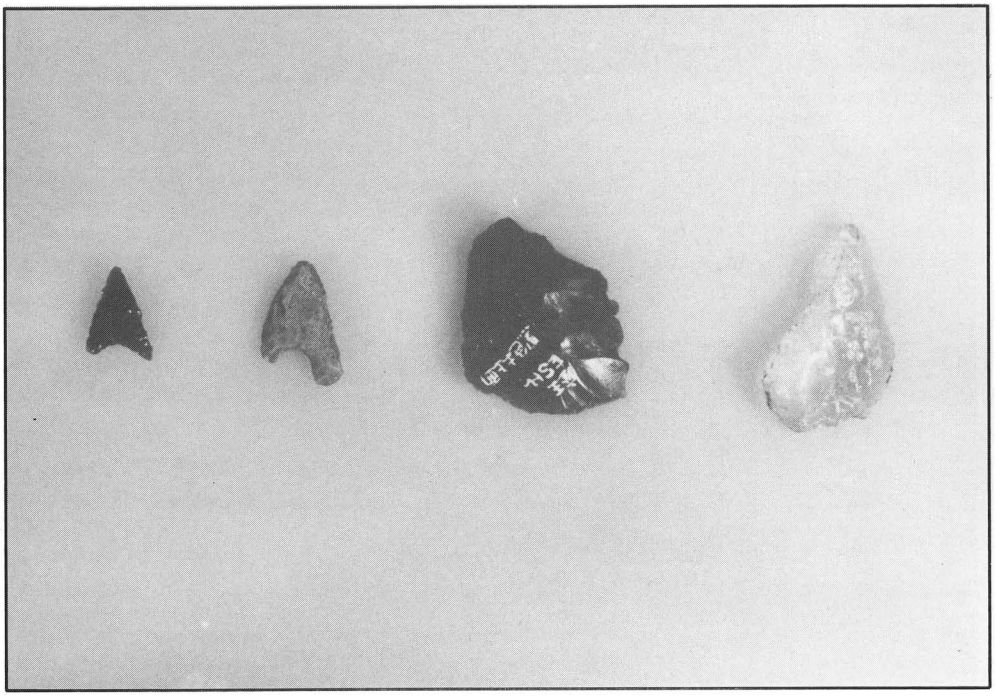




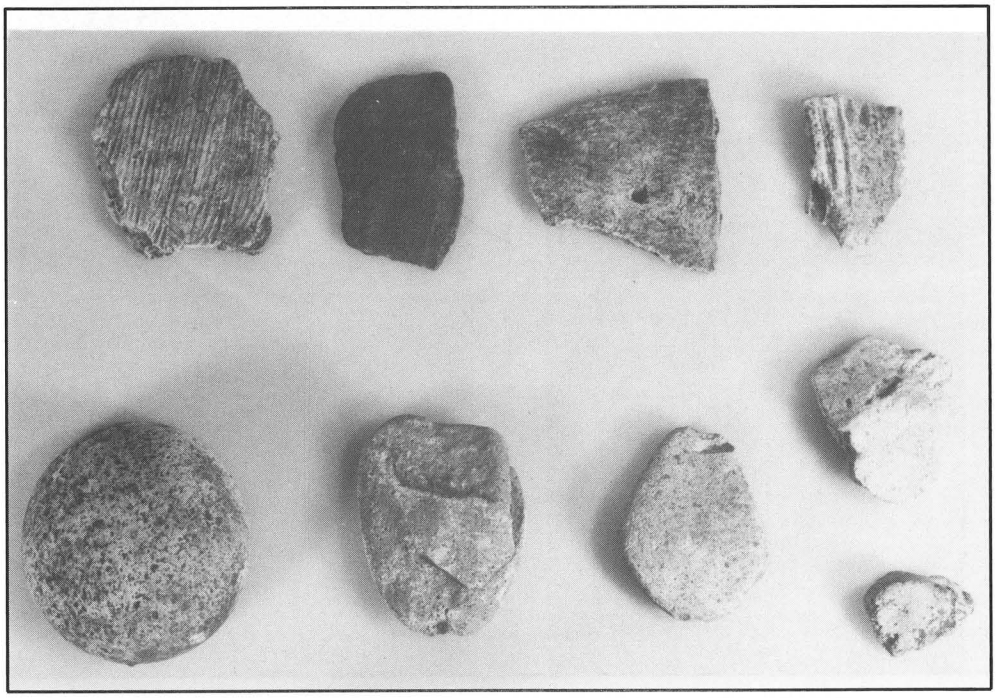
ガラス小玉



須恵器・青磁・白磁・瀬戸焼

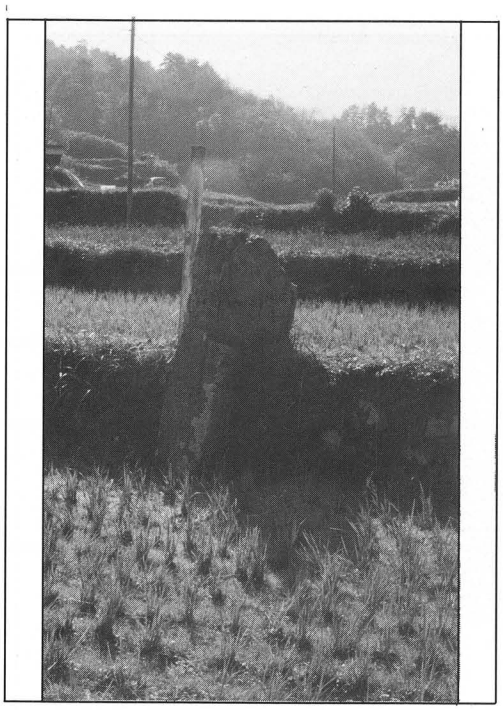


石　鏃・その他

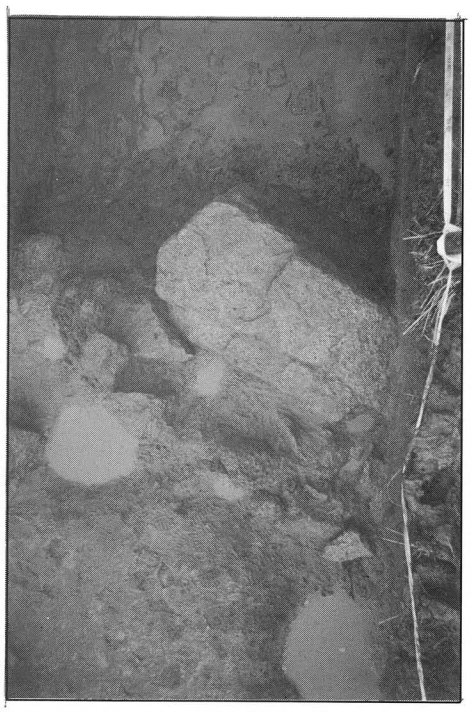


縄文土器・石器

上塚田古墳遠景

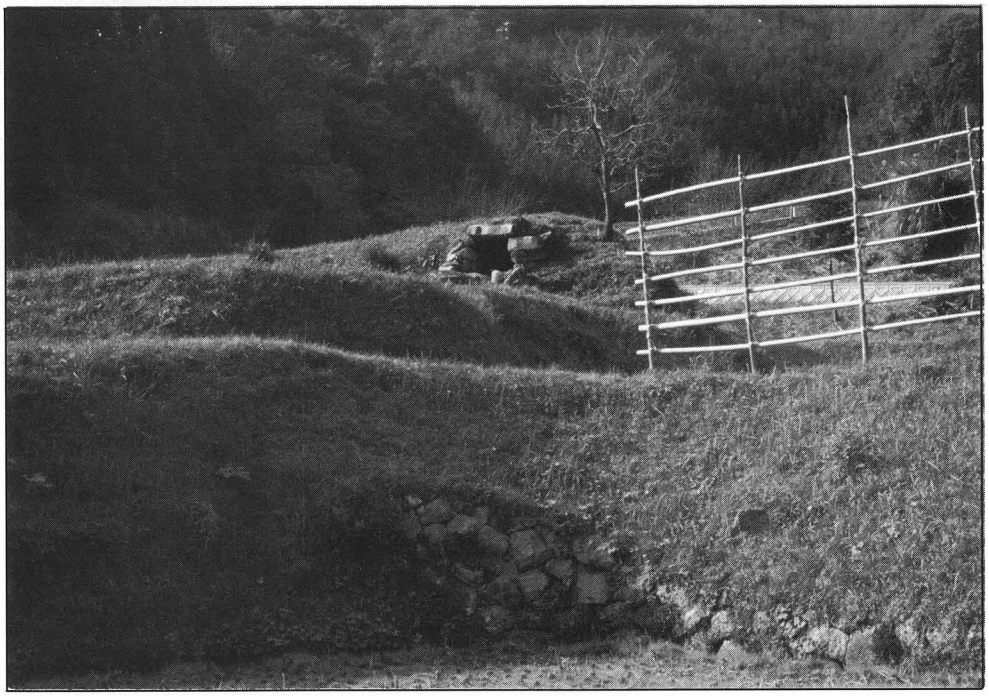


上塚田古墳近

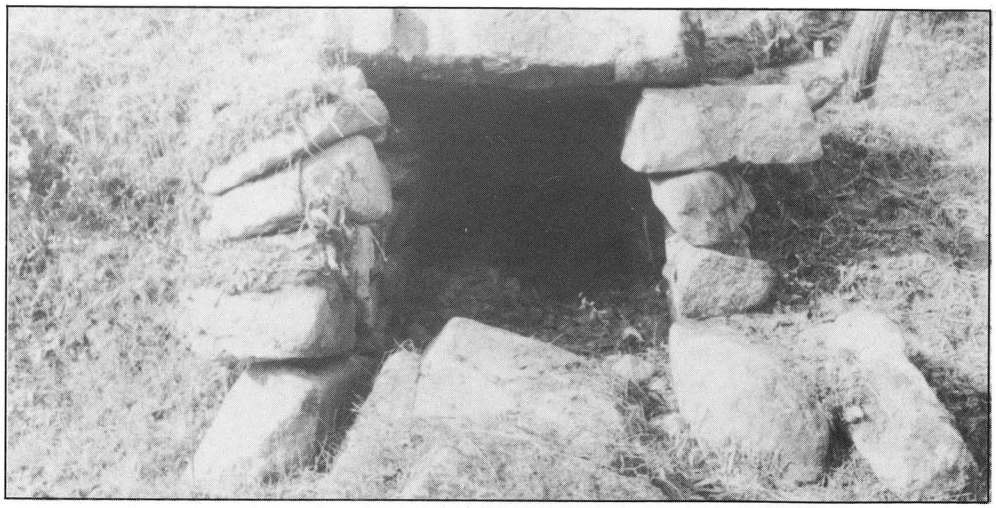


上塚田古墳遺構石組み

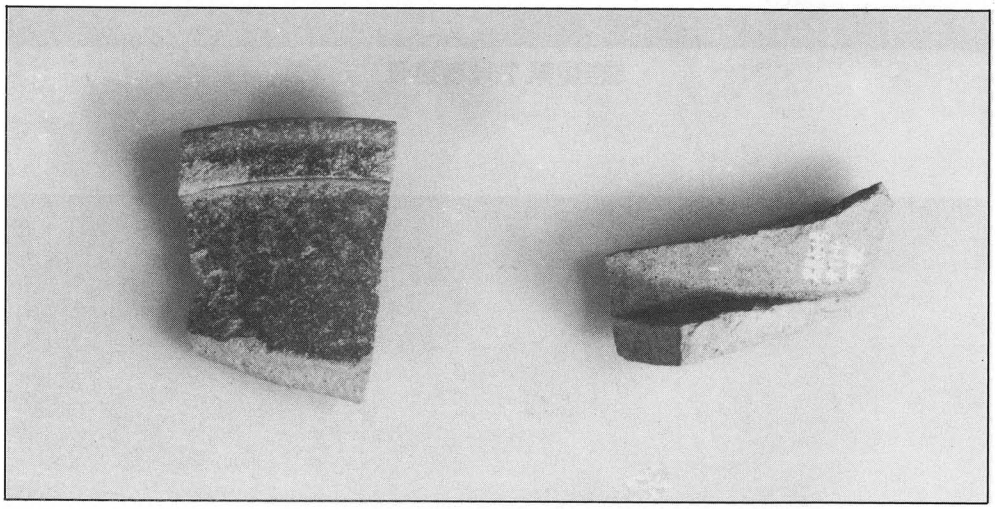
岩屋第１号墳遠景



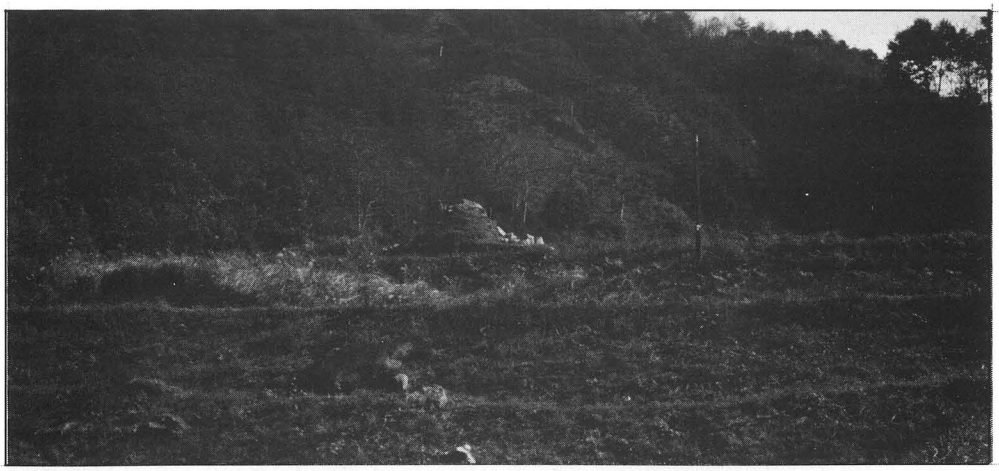
岩屋谷第１号墳近景



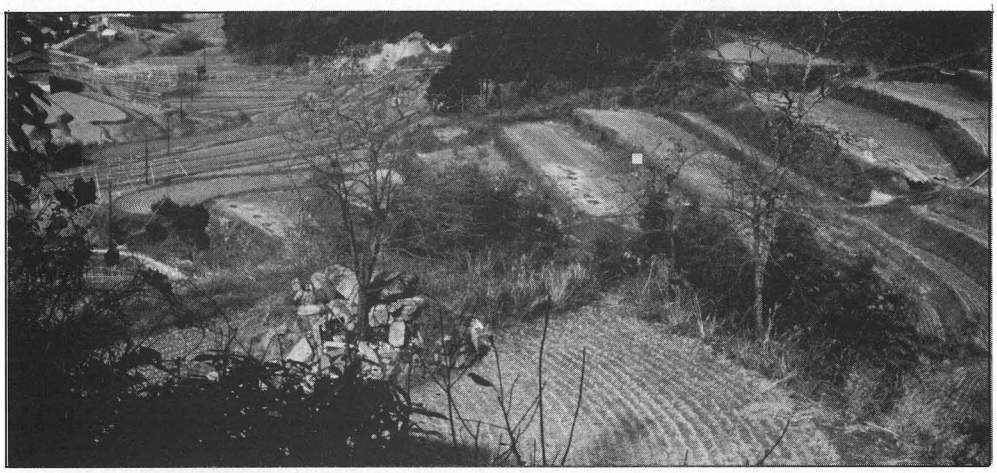
岩屋谷第１号墳石室



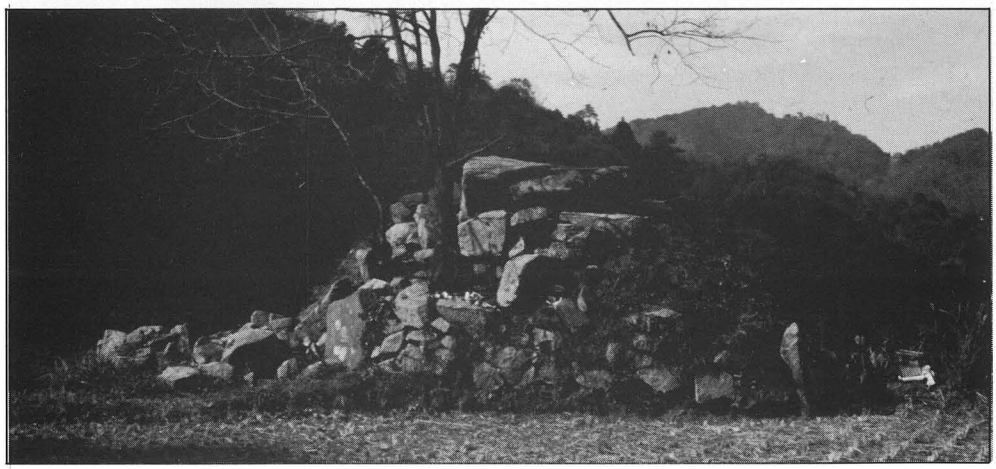
出土須恵器



岩屋谷第２号墳遠景



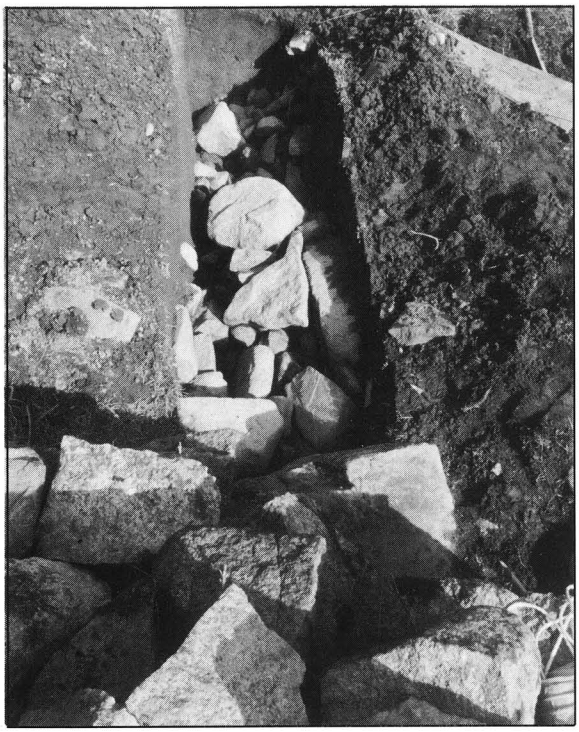
岩屋谷第２号墳中景



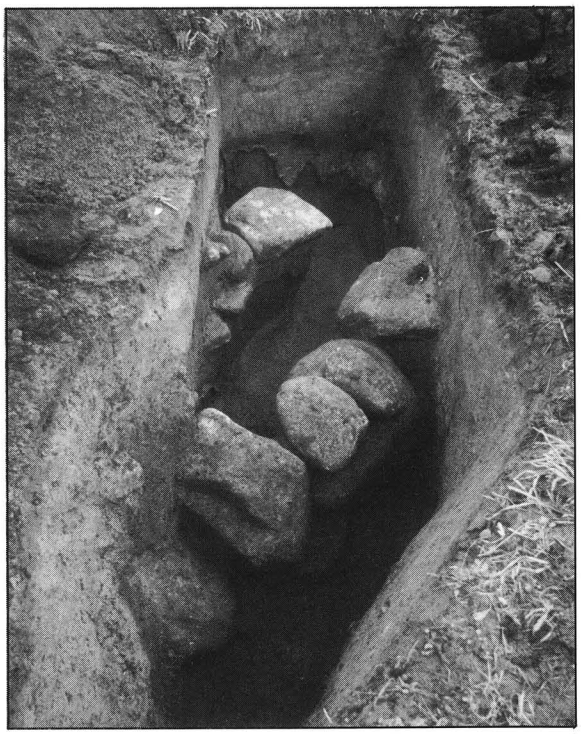
岩屋谷第２号墳近景

塚田古墳遠景

塚田古墳近景



第１トレンチ平面



第５トレンチ石列状況

岩屋谷古墳群他発掘調査

昭和56年3月

発行　島根県能義郡伯太町母里
伯太町教育委員会

印刷　安来市安来市町
宇山印刷